

曾我會稽山

近松門左衛門作

地照射する火串の影の狙ひ獵。狗は獸を追うて殺し人は其の處を指し示す。今諸君は功犬なり。齋何が如き勝つ處を指し示すは。功人なりとの故事の心を爰に狩衣。振野に暫し御宿陣右大將家の御威勢は。富士より高き鎌倉山。建久四年五月二十八日と。明るも寅の一點にオロシ虎の御門ぞ。開けゝる。御留守なれども式日の御禮は御臺所に與奪あり。竹取の間に出で給へば。和田島山千葉上總。大老執權の北の方を始として。工藤梶原宇都宮土肥佐々木三浦黨。眠近高家の内室達。其の外御譜代由緒ある一家の子の妻女迄。夫々の格に任せ座次を亂さず參列して。二十八日の御禮一度にあつと拜謁ある。袖の縫物綾錦高燈臺に輝きて。金泥砂子竹取の翁が娘の彩色も。フシ光を恥

づる許りなり。地斜ならざる御氣色にてなう方々。富士の御狩の御留守に。幼稚の頼家いひがひなき自ら各とても女の身。鎌倉を靜謐に持固めしも大將殿武威目出たき故ぞかし。地あの庭上に並べし御狩の中の勝れ物とて送られし。射手の譽も顯すため。それく目録と宣へば。中原の吉之が妻承り。男文字に和訓を付けて。天爾波巧みに讀んだりけり。御帳面の第一の筆も夏毛の窠は。大友の市法師まだ十五歳の小腕の矢先。就中御褒美たり。番鹿は秩父の六郎。三町五反の尾上を隔て。鐵細かき鹿子まだら御行臈の料たるべし。牛とも象とも紛ひて三刀かき切つたる肋骨。仁田の四郎忠常が世上の美談に乗つたる猪。御狩一のフシ功名なり。長沼五郎が兩腕。さすや

岡邊に蓬喰。幼々と鳴く小牡鹿の角。二つに引裂きて是を手取りの證據とす。捷は土肥の彌太郎。巖に躓く狼その。喉首を踏んで叩きとめたる一撃の。力鐵鞭恐ろしき。虎狼より盛長が組んで仕留めしあら熊と。名は明けき月の輪も浮んで薄の波走る。番ひ兎の登り坂。駒馳達へ長刀に。のせてとめしは小山の判官。皮に疵なく山猪の肩の骨を射摧きしは。淺利の與市が神頭の弓勢。愛鷹山に足くらべ追ひも。追うたり二十八町。息の限りを追詰められ。狐は死して岡部の六彌太。是も手取の功名たり。コハり玉の太郎が鑓玉に上げて突きしは飛鳥の業。雁股早く飛鹿の。もと首射きる安田の三郎。竹の下の孫八左衛門向ふ猪に矢はたゝす。打物にて切りとむる宇佐美の左衛門川越太郎。相馬の小太郎結城の友重。土屋平山千葉宇都宮各矢先の功名あり。外に牡鹿一頭。工藤左衛門祐經秩父の郎等本多の次郎親經。一の矢二の矢の擗り。鹿一正

に矢三筋。祐經太腹本多は草分六分の勝に候へども。鹿論未だ落居せず二本の矢は射付けの通り。仍て終りに記す者なり。御狩場の別當和田の義盛判と讀上げれば。伺候の女中面々の殿御の武藝を身の手柄。御臺所も御機嫌のフシ御前。ざゝめくばかりなり。地祐經が妻阿古屋の前進出で。聞き憎き御帳面。秩父の郎等陪臣の本多親。我が夫祐經と鹿論さへ慮外なるに。本多が六分の勝とは義盛の依怙愈甚。末世に残る御記録祐經一人射留めしと。書改め願ひ奉ると憚りなく言上す。義盛の北の方巴御前聞きもあへず。是阿古屋殿。本田の次郎親經は秩父の家來といひながら。武藏源氏の歴々。軍の場數は御出頭の工藤殿も及ばず。此の度の御狩にも。假屋奉行夜廻り御直の御用承り。御近習の御家人並。女房にも御臺所御對面ある程の筋目。誰に恐れ負けてるん。義盛が依怙とは工藤殿の奥様。ちと口上が出来過ぎたと膝元に摺寄つたり。阿

古屋色を變へ。いや昔は王の孫にもせよ。今は秩父の歩行若黨。そもじも昔は朝日將軍本會殿のお部屋御臺巴御前。大力の子胤を取らんと和田の義盛申し受けられ。今は我々同輩。其の時々の身の程知らぬ無用の本多が系圖だで。しかも金泥にて。工藤左衛門祐經と矢印あり。本多が矢には家名もなき平頭の的矢。狩場の法も知らず慮外千萬の鹿論。地御帳面替るか本多が名を消さるゝか。いつ迄もお願ひと額髪押し撫でて。まばゆからぬ張臂辯口。末座に着きし本多が女房常夏。詞これく阿古屋殿。慮外といふは馬の乗合座數の高下。盃の前後などの事。扱は戰場にても目上の敵には太刀打も慮外と。後を見せて逃けらるゝな。地弓矢の道不案内で。小差出た批判かたはら痛しと嘲笑ふ。それくく。調慮外といふが其の事よ。イヤ上をもどく。地其の方が慮外よと。兩方聲もあら木の眞弓。フシ詞銳にいひはりける。地御臺所御聲高くあれ鎮め

られよ人々。詞老中さへ理非を分かぬ鹿論女の批判及ばぬ事。されば蒲の御曹司範頼入道殿。今通世長袖の身ながら頼朝公の御弟。折しも在鎌倉こそ幸ひよ。地北の丸に請じ互に遺恨なき様に。中分の扱ひ御料簡に任すべし。地巴宜しう沙汰せられよと御褥を立ち給へば。阿古屋つつ立ち工藤左衛門祐經と。匹夫下郎の本多と。中分の扱ひとはお恨めしい御臺様と。御裳袴に取付く所を常夏引留め。匹夫下郎とはどれどの口から。コレ三箇の庄の主近江八幡なんど本多程の者は。家來に持つた大名の御前様。下郎といふが不思議か。ヲ、其の大名の御前様。地息の根止めんと瓜紅血ばしる摺みあひ。百花亂るゝ女中の騒ぎ巴御前すんど立ち。兩足宙に俵がへし。小脇にかい込みぬいやつと締めたる大力。肩も驚もばらばら涙。フシ鼻息ばかりたえくとなり。詞ホウむつちりと抱心地よい甘さうな肉合。祐經殿の御祕藏が尤さりながら。御臺様の御

前で。餘り慮外な口がさがさない。乗物下馬

迄巴が送る。我が儘がいひたくば祐經殿

歸られて。夫婦間の私語。無理も我が儘も

越言は御勝手。人中で我が儘いへばまつ此

の如く。地痛いかく。頭痛い目に逢ふぞ

やと。地締付けく。ヤ片荷づつて力に足ら

ぬ。相手の不祥常夏と。片手に取つて引寄

せ横だきしめたる弓手の小脇。下髪垂れて

薄化粧。二つ頭の顔の色我が顔共に三つ巴。

太鼓の御門明け六つの雲ほの。くくと三

白旗の。フシ流れは同じ。調源の蒲の御曹

司範頼朝臣。天下の疑晴さんため修善寺に

て御出家あり。法名源雄と衣を墨に染めな

から。鎌倉殿の御舍弟世の覺え重けれども。

身持は輕き駕籠乗物只一僕を待にも。草履

よ杖よ吳竹の。フシ敷醫に紛ふ風情なり。地

大名小路の升形より引馬に五つ道具。乗物

の戸八文字に開かせ布袋乗に乗つたるは。

梶原平次景高なり。地範頼の御乗物道を讓

つて片付けば。梶原が近習ども蒲の入道殿

の御通り。下馬なざるべきかと伺ひける。

調世捨坊主に何の下馬と顔差出し坂東聲。

それなるは蒲の入道殿な。工藤と本多が扱

ひのため北の丸へ御參か。我等始め御留守

役の大名小名相詰め申す。出頭第一の祐經

と。陪臣の本多が鹿論は提灯に釣鐘。鶴の

毛の先程も祐經ひける扱ならば。お爲によ

く御座んまい。乗物やれ。地參れと傳へて

八枚肩。徒歩臙脛やつこらさ。邊をはねて

跳馬の人を蟲ともはいくく。地埃蹴か

けて通りしは。フシ存外至極の無禮なり。

地掘抜井戸の方より二十ばかりの若侍。編

笠ぬぎ捨て両手を土に踏うたり。調蒲殿御

覽じ。浪人が主持か此の方への會釋ならば。

お通りやれ。地くくと手を出し給へども。

只あつくとばかり差俯向きステテ忍び。涙

にくれ居たり。蒲殿も斯ばかりの涙怪しと

乗物を。おりるの衣立寄つて如何なる人の

何故に。用ありけなる落涙見捨てがたしと

宣へば。涙に沈む顔打上げ直に申すも恐れ

ながら。口惜しの世の中や候。調殿は忝く

も頼朝公の御弟。九郎判官殿諸共に平家追

討の御代官。五萬騎の大將軍。地一の谷の

大手生田の杜を攻破り。武功と申し御連枝

の六十餘州に冠たる御身。梶原が末子なん

ど我は顔の乗打ち。御無念察し奉る。調我

等が主人も伊豆相模に名を得し者の末なれ

ども。運の變によつて一族に父を討たせ。

本領は其の者の秣刈場となり果て。地昔

の劍鏑浪人貧しき家には故人疎く。世にも

人にも侮られ。何時花咲かん。フシ埋木の。

地身の無念存じ合せて不覺の涙。問はず語

りも御恥かすと又。涙にぞ咽びける。地入

道殿小聲にて。調扱は會我兄弟が下人よな。

地年月の堪忍さぞあらん。祐經君の籠に誇

り。詔を勤めと紛らし世に憂ひ。鎌倉武士

の風儀を素す佞人。エ、齒痒し得討たぬな。

調入道昔の範頼ならば天晴力を添へんすも

の。地もどかしさよと宣へば。地御覽の上は

包むに及ばず。會我が下人鬼王と申す者。

今度の御狩を武運の時と兄弟忍び巡りしに。昨日の朝山敵祐経尾越す鹿に目を付け。弓矢番ひ追ひかけしを。茂みの蔭より五郎時致真直中をと急ぎに急いで放つ矢が。敵の竹笠射かすつて鹿の草分ずんばと當り。

地祐経が矢は太腹。難なく鹿は止まりしが。時致は隠れなき大力。筈廻り太く矢束も抜群。殊に名乗り家名の印もなく。既に矢穿鑿に及ぶべかつしを。秩父殿の執權本多の次郎親經。我こそ一の矢射たんなれと本多と祐経鹿論に取りなし。地大事の難は遁れしが。今度の御狩に討ち漏らさば何時の世にか優曇華の。曾我が天運開くべき。御賢察とばかりいひさしてスエテ頭を下けてぞ泣き居たる。地蒲殿も涙ぐみ。あつたら勇士ども世に埋もる、不便やと。懐中より木机二枚取出し。是は北條時政大江の廣元兩印にて。鎌倉殿の御前迄も内意を達する割符なり。地祐経が用心構へ頼朝を後援。尺寸側を去らぬと聞く。兄弟に是を貸す何

處迄も恐れなく。鎌倉殿の降許にて贖業の敵討。花やかにして無念を散せよ。必ず隠密々々と別れ給へば鬼王有難しとも冥加とも。詞は足らず御厚恩涙つゝめども。心に漏る、籠乗物伏拜みくゞてぞ。別れ行く。北の丸の大廣間工藤本多が鹿論。蒲殿に扱はせ穩便に濟すべしと。巴御前承り鹿を庇に昇きすゆれば。御留守番の大小名遠侍に相詰め。フ蒲殿をこそ待受け

けれ。地梶原平次景高祐経が一子犬坊丸。郎黨八幡の三郎相具し御廣間にのさばり出で。八幡の三郎目鼻を撃め。御扱々ない大矢御覽なされ景高公。小兵の本多が射たればとて一間も飛ぶものか。是を射ん者言ならば鳥の海彌三郎。當代は淺利の與市殿。然らば矢印ある答名を書かぬは合點。阿呆力の曾我の五郎時致といふ饑渴浪人。主人祐経一門の端毎度の無心合力。何貸せ彼貸せもらかせの騙り事も人食はねば。狩場で小盗みせんため紛れ入りたるに疑なし。

和田殿の不穿鑿兎角梶原殿御父子にかけねば。明白ならずとそやさされ。明な。重ねて本多めに射させて見れば忽ち化が顯はる。此の矢は景高預つたと拔かんとすればは梶原殿。其の矢に指でも觸るが最期腕を巴が引抜くと。地腕捲り觸捲り紅梅もるゝ雪の膝ふし。骨太々と練絹にフシ岩を包みし如くなり。地惡しかりな

んと梶原先づ蒲殿が來せて扱ひの術に依つての事。ナウ女の力と首のない石佛。外の用に使はれぬ。何の役に立たぬ物と。御書院にぞ通りける。地物に堪へぬ朝比奈の三郎。斯くと聞くより御番所の柘の棒提けて。斷込む所を母飛びかゝり。棒の物打確かと取りヤイがきめ。御殿中を知らぬか。騒ぎを止め穩便に納めよと御意を受けた巴が子。此の棒で誰を撲つ。ヲ、曾我殿原を盗みよ騙りよ。父義盛の不詮議と吐かした奴等。素頭撲碎く怪我なされたと捻上ぐる。コリヤ撲碎く程なれば汝は頼まぬ。

地 あんばく者め又ひぢり餅喰くひたいかと。片足あけて真中より棒をはつしと踏折ふみちがつたり。梶原め八幡やまだめ殿殺はてしして退ひげんと飛んで出づるをむんづと組めば。朝比奈兩手をさし込んで親子四つ手に取組とりだり。コハリ母も母なり子も子なり汗を貰とり頬髭ほきびと。風に亂るゝさげ髪かみのすべり出でたは母の腹。今は我等が腹槽はらやちと三尺ばかり釣上つぐる。巴兩足踏放し我が身を重りに持上もぐれば朝比奈も朝腹に。大力の母倦あみ果て。釣下つしつ釣上あげしは龍の氣さしの六々鱗りくくりん。滾こつて落つる水の勢いきほを敷をいて龍門の。瀧登りとも謂いつべく。母跳返はなはし「放れ大の男をひつ擔かぎ。どうと落す其の響こき。ナホス祇園精舎の釣鐘を切つて落すも斯くやらん。フシ御殿も搖ゆぐ許りなり。地 泣顔にて朝比奈。むづ／＼起きる胸骨膝に引つ敷しき。阿エ、誅つましの荒者め。親に世話を揉もまするな。ア頑固かたがに會あい

切つての投けてのと手習ひは否いながる。物語みは嫌きらひで和田の家が嗣つががるゝか。地 サア今から手習てするかと太股ふももを。ふつ／＼と抓つかられて。地 あ痛いたく／＼あ痛手習てひしましよ。物讀みするか讀よましましよ／＼あ痛いたた。母がいふ事聞かねば又是またぢや。あ痛いたく／＼捻ね餅もちの味忘われなく／＼と。地 ふつ／＼振り引ひ起し行儀ぎよようして遠侍とほざひに相詰あり。何事なにあらうとお廣間へ差出さして慮外りょがいしたらば又是またぢやぞ。まだ怖おそい目付やめぬか。身柱みはしらに一柱ひとすゑうかと威おどされてお次へ立つ。灸あ嫌きらひの髭男短慮たんとりょの病母親やまははの。フシ意見いぞ藥くすり艾あなる。地 程なく蒲殿御入りと廊下番なご茶取次ちやくげば。梶原始め犬坊八幡出迎いむかふ。蒲殿暫しばらく鹿に目をとめ莞爾わんじと笑わひ。地 なう巴御前。寶を争あひ地を争あふは人間世の欲心よくしん。それとは變かり是は優やさしき弓矢の藝ぎ。其の争あひは君子なりと孔子も是を褒ほめ給たまふ。位争くらひ歌争うたひ春秋の詠よを争あひし。雲の上人の風骨かぜこにも劣おとるまじ。地 心憎こころにくさよ優やさしさよ爰こゝに一つの物語。

昔の／＼とつと昔の其の古。大和の國天の香具山といふは女山。又また磯傍山いそべ耳無山みみなし此の二山は男山。香具山姫ひめの艶うつくなる形に想おもをかけ。我が妻にせんいや我こそはと山と山とが妻争あひ。夜毎よごとに谷家震動やぶす。出雲の國に在あります阿菩あはの御神是みかみを救すくひ止とめんと。御船みふねを走はせ給たまふと聞き二つの山は中直り。阿菩あはの神は播州はりづ印南野いんなんのに神とまり在あります。此の三つ山の争あひ中の大兄おにの御歌みうたを。地 萬葉集には載のせられたり。今の世迄も眉目まゆめよき女をお山といふも。此の香具山かぐやまのフシ謂いれるなるべし。地 總じて物の扱あひには心なき山のかひもある。況いはんや文武の工藤本多。入道いりだうが扱あひ不足ふそくはあらじ。争あひを親みの始めにて。上下相和あするこそ。源氏長久國家安穩やすみの基もとなれと、御詞みことに花實はなみを交まぜ面白おもしろく笑わしき御扱あひ。巴あ悦よろこび小領こりやうきお次外様あ遠侍とほざひ聞傳きんでんへ／＼フシあつと感あずるばかりなり。地 莞爾わんじともせず梶原はな原はらイヤサ濟すまぬ濟すまぬ。地 第一本多だいいちほんためが體ていに似にぬ大矢おほや。殊ことに

的矢は業の矢として。親の敵を射る故實あれども鹿を射る法はなし。サア矢の主の詮議とせり懸くれば。蒲殿も當話の返答猶豫して見えけるを。犬坊八幡聲を揃へ但し本多が親を鹿に突殺され。其の敵射たる

か何と〜とやりこむる。お次に朝比奈堪へかね樓半身出でんとす。母きつと見て又なく。捻餅身柱一柱すゑうかと。ねめ付

けられて身を縮め、フシ引込む顔こそ殊勝なれ。蒲殿ちつとも臆せず。百様知つて一様知らぬとは御邊が事。的矢を業の矢といへばとて悪業の業と心得。親の敵を射る事と故實を一遍に覚えしな。是常に射なれて

矢業よきゆる。わざの字の聲にて業の矢といふ義なり。朝胡籬に的矢一手入るるは侍所瀧口の骨法。親の敵に限らず鳥をも鹿をも射る時あり。長袖となりたれども家に生れ弓馬の道は入道こそよく知つたれ。謂は

れざる詮議推参なりと御氣色變つて宣へば。イヤサ主人祐經を曾我兄弟が。親の敵

と狙ふ由念を入るゝが僻事か。チ、さもあればこそ願朝の膝許離れず用心する祐經。曾我兄弟に翅はなし何を知邊に御前近く忍び入るべき。地用心無用と仰せも果てぬに

梶原イヤ〜。祐經が頭を嫉みそねむ者多く。曾我を引き御前通路の割符の札。彼等が手に入るまい物でなし。御身の方に

も彼札二枚受取りて置かれしが。散さす手まへにあるならばサア。只今是にて一見せ

ん。ヤア御邊に咎められ。是に候梶原殿とておめ〜と出すべきか。大事の切手汝等には見せぬ〜。地扱こそ〜見せぬは曲

者。曾我に割符をくれたは必定推量は違はぬ蒲殿。ヤア蒲焼殿蒲焼の鰻入道殿。ぬら

くら抜けても抜けさせぬと。惡口雜言手詰になれば蒲殿も。無念餘つて一世の浮沈念

き逆上したる顔色。巴御前は根元知らず。何事やらんと氣を盡し、フシ心を配つて控へ

たる。これ梶原。入道が受取りの割符紛失せば何とする。チ、曾我は伊東が末天下

の御敵の引入れ。よい仕合で切腹々々。ムウ入道が切腹には、冥途の供を召連るゝが合

点か。洒落臭い誰を供に。梶原平次景高を連るゝわと衣の下の薄氷。地一尺二寸抜討にはつと飛退く梶原が烏帽子のまねきを切

落され。後障子蹴破つて同じく逃けて犬坊に。續いて逃ぐる八幡が肩骨脇つほ迄切下

けられ。うんと反を取つて押へ胸元を三刀刺し。死骸にどうと腰打掛け。一息ついで

立ち給へば。地お次外様の騒動上を下へと返す音。巴御前大音上げ。蒲の入道殿仔細

あつて八幡の三郎をお手討ち騒ぐなく。御所へ走り御臺所へ注進申せ。御用なき者

此の内へ一人も叶はぬと。地戸口に立つて呼ばはりしは。木曾殿の後家義盛の、フシ北の方ぞと物々し。地其の隙に蒲殿衣服捨て齒

噛みをなし。地エ、打物短く梶原めを切損じて口惜しく。八幡輩五十人百人成敗せ

しとて誤る筋はなけれども。地割符の札の御詮議一度は切らで叶はぬ腹。世に健氣な

る曾我がため捨てん命。遁世の身の悦び導
き給へ南無歸依佛と。小脇に突立て引廻し
返す刀の切先唾へ。眞逆様に貰かれ。三十
五歳五月間。フシ短き夢と消え給ふ。地御臺
所の御使者として重忠の北の方。銀杏御前
徒跣足にて駈付け。詞様谷の四郎重朝二
の宮の太郎安清を召出し。榛谷は死骸ども
御預け。二の宮は富士野へ早打。蒲殿御切
腹會我兄弟御狩場に分れる由。狼藉なき
中急度御詮議遊ばせとの御口上。晝八つの
時切り半時の半時違うても越度過意仰付け
らるゝとの御意大事のお使早う。地畏
り奉ると駈出づる刀の鐘株谷の四郎確と取
つて引留め。詞こりや待て二の宮。御分は
曾我の姉聲小舅の難儀する御使。眞直には
得いふまい。役替へして死骸受取れ。地富
士野へ身が罷ると引戻して駈出す。榛谷
が鐘二の宮搔搔んでからくくとし笑ひ。詞和
殿は祐經と相祐祐經を引く心から此の二の
宮を疑ふな。似合うた。ヤイ一門縁者

の好みと御奉公とは格別。ム、疑ひを晴し
て見せんとどうと引据ゑ。地床の硯引寄せ
三行半にさらく去つて去状。裏さしの筭
暇の印と巻きこんで家來の侍呼寄せ。詞宿
所に歸り女ども三世の縁の切目なりと申し
渡せ。地富士野の御使曾我と他人の二の宮
太郎といひ捨てて駈出す。袴腰むんずと抱
留め。詞人に心を許せんとさつぱり立受
取らぬ。お使は榛谷の四郎重朝が乞受ける。
是非にやらぬと引留めたり。地エ、面倒心
急き五つの時に程もなし。二十里に餘る
道三時切の早打天狗の羽をも借りたい所。
時刻延ばして二の宮に腹切らせん巧みよ
な。腕ふし斬放す奴なれど互に御用蒙る身。
騒動の上の騒動命は助くる爰放せと。捻ぢ
ても押しても榛谷少し力増し。紐付いて動
かせずお次に朝比奈身を揉んで。齒痒く間
練く遣戸口より身を半分。齒嚙みをしても
母の怖さずつと引込み。によつと出しては
ずつと引込み。業を沸かして睨む顔。巴御

前きつと見て。詞やれ朝比奈ちやつと來て
働けく許す。チ、地まつかせと踊出
で。母の御免ちや忝しとつとより。榛谷
が兩腕取つて捻上げ。サアお往きやれ二の
宮。地急用のお使物申すも暇惜しと。フシ
ひ捨て駈出し走り行く。詞二の宮を遣るか
らは我等に何の言分。爰を放せ朝比奈。チ
ヲ二の宮は時切れおのれを宥すも時切れ。
地知行漬しの米權飯櫃かけはんがい。片手
に足らぬ中は空との明はんがい。御時分能
からう朝比奈が握拳の握飯。喰らうて見よ
といふ空の霞におつる鐘の聲。ごんと鳴れ
ばぐわんと喰らはせ。又ごんと鳴るぐわん
と拵る。三つ四つ五つ頭の頭で数とる拍子
取る。次手に初夜後夜晨朝人相寂滅爲樂。
跡はひららく頭の骨砕けて百八ほんのく
は。撮んで小庭へどうと投げ。思へばく
梶原め釣影の釣鐘面。拵碎かいて残念至極。
よし。今は逃がすとも我見込んだは釣百
倍。一度はとらで置くべきかと。日数を泳

ぐ生死の海。淺瀬は波も朝比奈が待来る奇
来る磯の波どう。く。と。ろ。く。と踏鳴
らす。女波男波の足早く鯖を並べてひと
つれ共に。御所へぞ参りける。

第二

片削の千木や内外の曇りなき。空も五月
の二十八日式日の御祝儀に。二の宮太郎安
清出仕の留守の間には。夫に代る武士の妻
心の障り身の不淨。手水の水に瀧ぎ捨て。
スエテ袋櫛より取出し。紐解く大聖不動の尊
像五月なり縁日なりと。床に移せば女子ど
も供へのお神酒お鏡に。向ふ心の眞直なる。
フシ冥慮ぞ暗に有難き。二の宮の姉御前心
解かに合掌し。夫の武運長久御狩の御留守
預りて。大切の役目禍のない様に。取分け
弟曾我の祐成五郎時致。一萬箱王と申せし
時不動を工藤と聞き違へ。勿體なくも尊像
を。切り奉らんと迄思ひ込んだる親の敵。
工藤左衛門祐經を首尾よう討たせたたび給へ
と。只一筋の念願は。フシ感應。嘆と著し。

家來白崎八平次速しく。且那より火急の
御用。参りつけねど御居間へと。御免も乞
はず大息ついで畏る。女房驚き何の御用
か氣遣はし。御口上はと問ひければ。何
れも同じ御奉公とは申しながら。斯る御使
身に取つての大難と。地巻込む暇の印の筭
一通を差出せば。開いて見るや見もわかす
はら／＼涙の頬振上げ。御身も患災御武運
も長久と祈りしはたつた今。御出仕の折迄
も云ひ語りひし数々は。捨詞か空言か恨め
しの心やと。巻いては解き讀んでは泣き。
去狀顔に押當て。思はずかつはと身を投
伏し。フシ聲も惜まず泣きわたる。在合ふ腰
元下女はした様子知らねば泣かれもせず。
互に顔を見合せて溜息。フシついたるばか
りなり。コリヤ八平次。地どうした事ぞ
隙やると御口上はなかりしか。様子は知ら
ぬか知つたらば聞かせてくれと氣を急げ
ば。委細の事は存せねども祐成様御兄弟。
蒲の入道殿に方人なされ。頼朝公を討奉ら
ん企てと。梶原殿の言葉によつて入道殿に
は御切腹。それゆゑ且那は御狩場へ御注進
の御使。八つ切との仰を請け榊谷と又口論
あり。地お暇の狀印の筭。渡し申せと仰よ
り外には何も存せずと。いはせも敢ずムウ
聞えた／＼。安清殿は最早狩場へござつ
たか。イエ／＼御前で口論最中。地今頃お
立ちも存せずと聞き捨て、ずんと立ち。脛
高々と帯引締め。誰ぞ足早な女子ども。
地薙刀持つて追付けと云ひ捨て、駈出す。
各慌て縋りつきお里へではあるまいし。恨
み云ひにお出で遊ばすはお道理といひな
がら。殿のお歸り待受けて詫。地なさる、
がよい筈と。止むれば振放し退去もある習
ひ。我が身の事は兎も角も。其の儘狩場
へやりましては今の恨みつらみより。増つ
た歎きもあらうかと思ふゆゑ。搔きたくる
程氣が急くもの。地まだ／＼待つて居られ
うか。八平次お留守大事にせい。皆の者ど
も頼むぞと下婢一人引具して。振撥けたる

薙刀の道をそ。らせて三重へ鳴る鐘の。フシ

空四つあがり。地藤澤や澤邊の水に富士映

る。雪さへ暑き。フシ夏の旅。空尻馬も徒歩

人も。蒸し来る雲に雨を乞ひ一吹さつとく

ださる。涼風價千金と。行惱む道の傍

に霞實園うて。杉葉茸く。清水堰入れ水車。

フシ寛の竹の糸筋に。滴るる水の。柳蔭。

小オクリ暫しとてこそ旅人の。立寄る所。フシ

天下一。根本仕出しの家と看板冷やり氷室

山。水つき出す染付けの。南京す。し鍋の

皿。樽折りしく青楓。フシ楨の葉もりのた

りなし。靈亂藥咽にはや秋風通ふ見世商ひ。

主は陸上の禪師坊。今度の御狩に祐成時致

年來の本意を遂げ。富士野は兄弟の命の露

の置所と。便り密に寺を出で御骨なりとも

拾はんと。懸髻髪に姿を變へ十日餘り此の

營み。御狩場見舞の諸方の使。大磯通ひ鎌

倉の。商人旅人暑を避けて上り下りの其の

中に。祐經が家來近江の小藤太鎌倉への歸

るさ。見世に立寄りコリヤ。亭主水くれ

いとぞ横柄なる。易いこと同じくは。心

太になされたらそつちもこつちも後藥。暑

氣を去つて渴きをとめ二日酔ひのよろ

も一膳喰へば心太。頼朝公も聞召し大名

小名御相伴の御膳料理。前代未聞のところ

てん扱も甘しと舌を巻狩。随分商ひにせこ

を入れ。往來の人の腰錢を狩取るべしとの

御錠にて。見世さきに富士を作り御狩の

體を人形にて。水機關に仕掛けて御目にか

くる。地サア只今始まりと。聲可笑くて拍

子とり。地御寮の其の日の御賞飮。青葉涼

しき心太おなかよしけに一二膳。白血受け

て。フシ召されたり。御相伴には五郎丸。赤

繪吳須手の錦皿下し賜つて是で喰ふ。價

は八十五文が所燃立つ腹を冷やりと。四尺

八寸の水船一尺八寸の突出し。十文字に

突くまに。白木の丸箸右手の小腕に持添

へて。フシ酒も過し奉る。秩父殿は精進汁花

袖散らして進まれたり。コリ和田の一門九

十三膳。代物合せて三百八十四文なり。千

葉小山宇都宮いづれも辛子はお嫌ひにて。

砂糖豆の粉のつこ此の。このこの高

すゑの曇れ喰ひ。皿も鍋猪口も鍋箸打つ

音がざざめいて。さしにも廣きナホ富士の

裾野にオクリ膳の。裾野はなかりける。

さる程に三千人の列卒の者。三日前から仕

過しの。借上は眞逆様。巾着振ひ底を叩い

て是で。御免と詫びるもあり。身の檀紅葉

色々の品を並べて人形に。人の氣を汲む水

車。水機關も鹽梅よき。フシ舌を廻して語り

ける。地亭主もほつと息つぎに上下を見廻

し。調あれ。東から乗物に綱付けて

人足が引いて来る。ムウ乗つた人が笑止や

腸が揉み切れう。ハア、急な用さうな。地

飛ぶわ。といふ方より順風の帆懸船オクリ

坂を。下れる車の如く。ゑいさ聲してはや

乗物見世先にどうと下し。人足に戸を開か

せ乗手は白布に。胴巻いたる仰々しさコ

リヤ。亭主。鎌倉から富士野へ乗物で

も馬でも早打は通らぬか。隠さずとも申せ

といふ。ハテ損も得もない事見たらば何の
隠しましよ。早打にも遅打にも今朝からは
此の乗物ばかり。よいわく／＼水一つと振仰
向いたる顔と顔。小藤太屹度見付けや梶原
平次景高公。さいふは近江の小藤太な能い
所で行逢うた。地咄す事あり近う寄れと招
き寄すれば禪師坊。是ぞ聞及ぶ敵の家來。

様子は聞きたしとこゝろてんがうする顔で。
によつと突出す鼻のさきこりや何しをると
梶原が睨みつける眼は血鉢。皿打落し豆の
粉はいに砂まぶれ。ひら皿御免と、フッ入り
にけり。聞して／＼狩場に別條ないか何
方へと問ひければ。さん候主人祐經。本多

と矢を争ひし大鹿鎌倉へと承り。風聞如何
聞いて参れと申し付け。鎌倉へといはせも
敢ず。其の鹿ゆゑに祐經殿降つて湧いたお
仕合せ。蒲の入道にも辯舌を以て腹切らせ
た。會我兄弟の奴原も。此の筋から罪に落
し縛首打つて工面。さりながら氣の毒は二
の宮太郎御注進の使。八つ切に御狩場へ行

く筈。女房を去つて會我と縁は切れたれど
も。彼を遣つては兄弟が事悪うは御前へ申
すまい。地某先へ駈抜けて眞逆様に言上し。
會我の根を絶やさんと只今狩場へ行く所。

二の宮がまだ此の所を通らぬこそ重疊々々。
御邊はあの藤澤寺へ登り住持に逢うて申
さうは。工藤梶原兩人が頼入る。今日九つ
の刻限を八つに打替へ給はらば。恩賞せん
と賺し込みあの高所から下を見下し。馬で

も籠でも早打と見るならば八つ鐘を撞かせ
よ。地其の時は我分別あり。若し又住持が
否といは片端に引括り。御邊鐘を撞いだ
がよし下人も連れて。急げヤツと景高はッ
シ心太屋に入りにつけり。地近江は僕を引具
して見上ぐる寺の總構へ。數十丈に山聳え。
常に參詣稀なれば。偶々登る人とても。ッ
シ道は木の根の足たまり。眞砂交りに石高
く。赤土露に踏り。岩角荒き荒男。手を
引き腰押しやう／＼と門外に吐息つぎ。ハ、ア見ゆるは三保の松原清見寺釣船も漕

いで行く。扱涼しいわ氣が晴れるわ海道は
糸引く如く。嶺から見れば麓の人が小さう
見える。地下から見るも斯くぞとは。我が
身を知らぬ愚人ども方丈に案内す。住侶
立出で對面ある近江の小藤太恩勤に。しか
じかの旨相述べれば住僧更に心得ず。工藤
梶原の御頼みとも覚えぬ物かな。鎌倉には
鶴ヶ岡の撞鐘を以て。御番所役の常規と

し。當寺の鐘は二十里四方諸職人諸商人。
地往來通路の刻限を極め。君より寺頭頂戴
す。私に刻限を違ゆるは諸民を迷はす大罪。
勿體なし／＼叶ふまじといはせもあへず飛
びかゝり取つて捻据ゑ。御出頭の工藤梶

原殿のお頼みを聞くまいとは。家來ども
坊主めら一人も残さず引括れ。地畏つて取
つては締付け捻倒し。一人も洩らさず猿繫
ぎ。聲立てさすな一所に追込み錠おろせと。
フッ引立て奥へぞ入りにける。地嶺は吹き
まく青嵐海道は蹴上げの土塵。一文字に來
る人は二の宮の御前。夫の安清が暇の

狀。三行半分讀む目も闇く涙絞つて鉢巻し

め。恨みを夫に思ひしら柄の薙刀搔込み。

走る道芝照付けて火を踏む如き燒石原。下

女は附き兼ね息切らし請申し奥様ちとお休

み何を申すもお身があつての事。地目が眩

ふく息が絶えると呼ばはり呼ばはり行く

先きに。昇据ゑたる梶原が早乗物。さああ

れが我が夫と。女房乗物取廻し詞これ太郎

殿安清殿。今朝曉の烏鐘も一つ枕に聞いた

中。何を悪目に離別とは女の夫に去らるゝ

は。軍に後を見せた同然。削つても此の恥

辱は通れぬ。日蔭者の曾我が姉。御勸氣の

者の末などと。傍輩の佞人どもに云ひまは

されての去狀か。地何れの道にも直に返事

が聞きたいと。薙刀構へ立つたる所に。茶

屋の床几をそろく梶原平次景高。薙刀

の柄をむづと取り。此の乗物を二の宮と

見違へて。己れと名乗る因果晒し。梶原平

次景高を知らぬかと。地呼ばはれば下人ど

も一度にはらりと取廻す。南無三寶人違へ

と。胸は騒けどそらさぬ顔。薙刀を挽放し

飛びさつて身構へす。詞コリヤ女。佞人

の傍輩とは誰が事。サア誰々をさして佞人。

惣じて曾我に好みの奴輩。世にある者を妬

み猜む僻み根性。安清が今日のお使も眞直

にはいふまいと。地某遮つて急ぐ御用に對

して狼藉者。餘すまじと主従拔連れ打つて

懸る。詞ヤア夫を出し抜く梶原。薙刀の刃

を戴けと。地八相に振つて懸る上を學ぶ下

女。腰の刀抜放し大勢相手に主従二人。切

結ぶも女業。こつちへ任せこそ望むとこ

ろてん。商人が手並を見よと山椒の粉胡椒

の粉。ラツ辛芥子それより辛い韓紅。唐辛

子の粉を圍みこむ。水桶に酢も醬油も搔交

ぜく。突出しを水弾き。群りがゝる雜人

鞞顔を目當にしゆつと突出す胡椒芥子の水

鐵砲。唐辛子の石火矢弓手へ廻つてしやつ

ぶり。馬手へ廻つて又しやつぶり。鼻を突

抜く噓吃逆。辛い涙に目玉も飛んで。咽

はひいく火花を散らして三重防ぎける。

地口もあかれず眼も眩む。蕎麥切料理に打

立てられ。ところてんどう敗亡し。梶原主

從八方散々迷失すれば除さじ遣らじと禪師

坊ッ跡を暮つて追駈けるッ中村宿の。

地方よりも馬煙霞を蹴立て矢を射る如く乗

り來るは。夫の太郎安清殿サア生きるか死

ぬるは此の所。あの馬止めよといふ程も。

家來に乗抜け稻妻走り尾筒を弓手から卷

けば。下女は鞍をかい掴み。止めても止ま

らず十間餘り引きずられても猶放さず。跳

上る馬に輪を懸けて。鞍づよに耐へしはッ

シ造り付けたる如くなり。詞安清はつたと

睨んで。二十里を三時切のお使仕損じては

一期の不覺。恥を知つたる男子なるぞ。地

尾箱至極と乗出すを引止め鐙に縋り。詞ッ

れないぞや二の宮殿。恥を知るは男子御ば

かりか。去狀受くる女の身是に上こそ恥辱

はなし。二人の弟が豫ての大望後見は石鐵

の楯よりも。頼みに思つたかひもなく。お

暇とあるからは兄弟が事も頼まれぬ。地見

る影もなき會我殿ばら。よしない縁を結びしと悔しい顔の色目も見せず。もてなし給ふ心に惚れて忝く。起臥起居一命懸けての官仕へ。見落しでもある事か。實き會我の悪目が。今日といふ今日見え初めしか。兄弟への面當か兄弟を見放す氣か。侘しき身なれど河津が娘。道理が立たねば暇の狀は受取らぬと。馬託に投付け縋付く。憂さと恨の諸手綱、フシ絞る。涙ぞ哀なる。地安清急いたる顔色にて。ひらりと飛下り木の根にとつかと腰打ちかけ。暇をくれた女。詞も交さぬ善なれども今迄の好み。聞かずや今朝の丸にて會我兄弟より事起り。蒲の入道殿御切腹鎌倉の騒ぎとなり。御詮議の筋目によつて。兄弟が命の大事となる仔細あるにより。密に老中の耳へも達し。首尾能く事を治めたく。心は先へ飛ぶ折ふし御臺所より。狩場の御注進ハツ切との御錠。願ふ所と有難く畏つてお請け申す所。様谷の四郎差構ひ。會我に縁者の此のお使

心許なしと。押へ争ひしより心付き。北の丸の殿中にて見事に去狀書いたるは。縁者を離れ諸人の疑ひ暗らし。他人の義理合はかりを以て。思ふ様に會我が肩を持たん爲の離別。地飽きも飽かれもせぬ妹背の中。此の外安清に別心なし。往還驛路に姿を晒し吠廻る程添ひたくば。元の如く二世も三世も變らぬ夫婦。然る上は見苦しげに縁者の依怙最眞罷りならず。兄弟老母の身上どうなりても構はぬぞ。必ず我はし恨むるなと云ひ捨てて駈出す。待つて下され去られませう。武士の情の離別とは夢にも心付にこそ。去狀を見てはつと急き安清殿と縁切れては。祐成や時致が片腕を落されたも同じ事と。悲しいやら口惜しいやら一途に腹の立つばかり。外の戮なき様に他人になつて兄弟が。力にとの誠の心。涙が溢れ忝い。縦へ此の身には不義ありとなりとも如何なる暇を付けてなりとも。兄弟の爲ならば離別してたべ去つてたべ。殺の狀をたべなうと引止むれば見苦し。と言へば斯く言ひ時切の。御使仕損じ腹切るが見たいな。なう情ない事いふ口で。去ると一口いはれぬか詫言しても夫には。添ひたいが女の習ひ。望んで去らる。あさましさ男も女も會我一家の。是程運の悪さはとスエテ包みかねたる。涙のさま。下女が目荒き帷子に。フシ涙の玉をふるひけり。地安清不便に堪へかねテ、神妙にも聞分けし。今日より他人の證ぞと。受取渡す名残も袖もふり切り出づる頭の上。一聲驚く鐘の聲。二の宮はつと指折つて三つ四つ五つ六つ七つ八つ南無三寶はや八つか。地九つの鐘を何としてか聞洩らせる。寒雲鐘を隔つといふ事を忘れしか。富士野へはまだ程もあり。刻限違へば様谷との口論無下となり。一生愛に極つて會我の運命我が運命。一時に盡きたよな。口惜しや無念やと。大地を掴み拳を握り。急きくる涙ヲ止めても止め。かねて見えにける。地梶原平次景高揃ひの

足輕數十人眞黒に駆付け。圓ヤア／＼の宮時切の早打。刻限相延び御注進の手筈相違。其の科輕からず切腹させ。首を富士野へ持参せよとお留守居中の評定極り。檢使は梶原承る腹を切れとぞ罵りける。いふ迄もなく刻限違ふは安清も覺悟。人の腹を借つても切らぬ人にも切つて貰ふまじ。首持参迄もなく。頼朝公の御前にてさつぱりと切つて上覽しやうらんに入るる首。御邊などが苦勞にもあづからぬと又驅出すを待て／＼。腹切りかぬる臆病者。家來ども引包んで打殺せ。地承ると再げば女房同じく二の宮に引添うて。打合はさんとせし所に。禪師坊何時の間にかは登りけん。藤澤寺の岩頭に大音聲。これ／＼驚おどろ忽たちなされな時が違うたと呼ばれば。與力の下人聲々にヤア面倒なる下司ひめ。住持を始め同宿迄繩は解いて助けをる。地投殺せ踏殺せと擲付くを取つて引寄せ。ゑいと療いでうんと投ぐればころ／＼と。二の宮が足の前轉び落つるは梶

原が揃ひの足輕。扱こそと安清も上を睨んで突立つたり。續いてかゝるを組んづ轉んづ眞逆様にすでんどう。小首を土に打折つて、フシやつとばかりに死してけり。藤太怒つて汝に負けてよい物かと。放逸無慚の瞋恚を張つてしがみ付く。地禪師坊二天四天の威をかつて組合うたり。上になり下になり起きつ轉んづ組合ひしが。片岸を踏崩し中ごし迄。ころび落つれど兩方放さず放しませず。さす股に踏張つて、フシ暫く患をぞつぎにける。地下には安清姉御前身を冷して待懸くる。サア來いと聲をかけ。一揉み二揉み枯木を倒す如くにて梶原が目の前。地響き打つてどうど落つる。透さず近江を取つて押へ馬乗に跨れば。平次景高はつと驚き。長追せば猶氣味悪しと、フシ跡をも見ずして逃失せける。地二の宮續いて追ひかくる。暫く／＼。一大事の御用先逃げば其の儘逃がされよ。なう二の宮殿姉御前と鬘鬘びんざんかなぐり捨て。我こそ弟稚名は

おん坊陸上の寺にて法師になり禪師坊と申す者。地様子は緩々申すべし梶原が指圖にて。當山藤澤寺の時の鐘。九つを八つに打替へ安清殿に腹切らせんと企て。地空は疊つて見えねどもまだ日は晝に傾かず。早く狩場へ御出といへば二の宮はつと嬉しく。近江は刻限を違へし大罪人法の如く討棄と。取つて引寄せ首打落し。地これも曾我の敵の小枝。暇の印と投出し一さんに驅出す。二人も跡を見送りて泣いて別る、雨雲の。絶間に洩る、鐘の聲。數へて見れば二つ三つ四つ七つ八つ。地又九つと勇み行き。遠ざかり行く駒の足。戀せぬ身にも思ひ知る飽かぬ。別れの曉の。鐘に涙はかかるとも。夫の武運長久と又逢ふ事を待宵の鐘に。契りて別れける。

第三

岡邊に揚を構へ。手の者組徒に鹿猿狩らせ。遊君黃瀬川の龜菊と。床几をならべ酒肴前につらね。〇ヤア〜者ども。色ある君が見物。豚でも鹿でも一疋生捕り。龜菊が髪筋にて繫いで見たし。地精出せ〜褒美を呉れる。畏まつた手捕りにせよと我が身知らずの猪武者。猪に駈散らされ鹿に突かれて吠るもあり。熊と組んで真逆様にこけざるが。頬骨搔裂く血まぶれの。一面は猿より赤恥かいて逃ぐるもあり。口は手柄のゑい〜聲喚き。叫んで三重〜狩り暮すッシ獵のきかぬも。地時の興祐經益受けながら。〇なんと龜菊。諸大名の假屋々々。呼ばるゝ傾城白拍子も多からん。身に揚けられたは仕合せ。鹿狩肴に酒盛とは。鎌倉殿の御臺所も叶はぬ榮耀。か程に思ふ祐經に廻り様がさうでない。そでない地ッ〜と寄添へば。いや〜上べばかりの眞實なしとは是此の殿。地毎夜々々龜菊には留守させて。〇お前は御所の假屋に寝て。つひに

寝姿見せもせず。地思ふとはしら〜しい。鎌倉の奥様の關の戸が厳しいか。〇奥様の文をそれ肌につけてぢや。地狩場では此の龜菊が關破りと。懐に手を差入るればハアア拜む〜。詞ゆめ〜格氣の文にてなし。祐經が身に取つて一つの難儀。いでさらば懺悔咄して聞かせん。定めて大磯の虎化粧坂の少將が噂でも聞きつらん。曾我の十郎五郎某を親の敵と。狩場の群集に紛れ入つて狙ふと聞く。地易々と彼奴等に呉れる命でなく。身用心の爲君のお側を離れず。夜は御所のお次に寝る其の窮屈さ。〇生れついた駈かき。地嗜めば咽に窒つて鼻へは出ず。耳で駈もかくの仕合せ。〇然るに鎌倉に残し置く女どもが。志の過分さ氣の働きの利發さ。曾我兄弟が胤變りの兄。京の小四郎といふ物にならずの野良者を賺し。金銀取らせ曾我の老母が方へ。問者に入れて附置きしが。地母は血筋の恩愛に騙され。何事も隠さず曾我が家内。箸のこけた事迄

京の小四郎が内通聞くは皆女どもが智謀。〇此の上はまだ悦び。彼老母十死一生の大病にて。死目に逢はんと兄弟を呼戻すとの内通。十郎も五郎も孝行な奴聞くと堪らず。最早曾我へ歸りつらん。地神明佛陀の守り目深き祐經。疫病の神送つて心は武藏野安は裾野。世間廣く今夜からどこに寝ても安樂世界と。語るを聞けば曾我の唯虎少將の所縁には。我も誼は外ならずスエテ耳に。應へて疎まし。列卒の中より八幡の三郎が弟八幡の四郎。三股角の大鹿荒繩かけてひつ縛り。詞背ごうの兀けたる盗人鹿。總構への柵を潜る所を。大勢下り合ひ生捕りて候とひつ据ゆる。地其の形頭胴體鹿の丸皮にて身を包み。咽の下に人の面。見知りのある曾我の譜代の團三郎。はつと見る目も濁江の。沿に漂ふ龜菊が。フッ土にも入りたき心地なり。祐經元より目かど強く。〇周の武王は滑溜の獵に太公望といふ賢臣を生捕り。孔子は魯國の狩に麒麟を得られし。

工藤左衛門祐經は富士の御狩に。曾我兄弟が下人鬼王が弟。團三郎といふ四つ足を生捕つたるは。武王孔子に劣らぬ某。ヤイ畜類。御吟味殿しき總構へ鹿の皮を被り。忍び入らんとせしは根ざしたる所存あるよな。眞直に白狀々々。偽るに於ては盜賊類になし。見苦しき刑罰に行ふべし。地吐かせ。フヤつとぞ睨付くる。團三郎少とも臆せず。鹿の皮を被り。畜生の眞似する程の不肖の身。見苦しき刑罰を。さのみ恥辱とも存せずさりながら。盜賊類に落されては。浪人の主人兄弟が悪名も悲しければ。仔細包まず語り申さん。地祐成時致は御狩拜見の爲。情ある大名達の組下に交り。此の狩場に罷在り。故郷に残す一人の母老體に俄の大病。時を待つ同の命の中子供の顔を一目見て。末期の水をも受けたきとの歎き。

人の屠り捨てたる鹿の皮を身に纏ひ。構を越えんとせし所を見付けられ。多勢是非なく此の有様。なうお女郎。地各は情ある流れの身知る人も多かるべし。知邊もあらば兄弟に此の趣を告げ傳へ。今はの母に親子の對面。臨終の望み叶へなば。身の功德ともなり申さん。エ、團三郎が一生の奉公を仕損ぜしと。血走つたる兩眼に涙をはらはらとぞ。流しける。ムウ老母の病氣につき。兄弟を呼戻すとは此の方に。割符の合ふ事偽ならず。地其の外尋ぬる仔細あり。所詮鎌倉殿御前にて吠えさせよと。ひつ立んとする所に五郎時致。何としてか見付けけん坂を下りに駆來り。列卒の兵五六人ひつ掴んで。手鞠の如く打付けく。團三郎が縄も皮もひつちぎり八幡の四郎をはたと蹴倒しどうと踏まへ。梢も搖ぐ大音にて。鹿の皮被きし人を。鹿と見るは愚かの眼力。曾我の五郎時致は。形は人にて魂の鹿をよつく見る。地鹿こそ通れ十郎殿下

り合ひ給へと呼ばはれば祐成績いて走付き。兄弟揃うて珍らしき對面と。太刀の柄に手を懸くれば。祐經が郎等主を討たすな除すなど。二重三重にかけ隔て引纏んで立騒ぐ。團三郎わつて入り。阿、く、且那龜忽なされな。今日のお命團三郎が預かる。御一生の大事のお使。故郷の御老母一昨日の夕暮より。俄の御病氣次第に重り只今も測られず。千に一つも御本腹あるまじき御覺悟今生の名残り。兄弟に一目對面せん萬事を振捨て立歸れ。地是に背かば時致は元の如く。十郎諸共生々世々勤當と。弱々弱る御聲を聞捨て、駆付けしと。聞くよりはつと力も落ち。兄弟目と目を見合せて、寝ぬに。夢見る心地なり。阿、御思案所でなし。京の小四郎の不所存人さへひつ添うて看病。此の人にお二人が孝行劣り給ひては。地冥途迄の御恨み天の冥加も恐ろし。祐經殿に和を乞うてお立ちくと勤むれば。祐經大きに力を得これく兄弟。阿父

の河津は流れ矢に當りしとも。股野の五郎が討つたりとも分明ならぬ親の敵。差當て祐經を狙ふとな。地よし／＼さもしけに言譯はすまじいぞ。サア。打懸げよ切懸げよ音に聞く程にもなし。怯れたか會我殿ばらと兄許見たる廣言。五郎たまらず神妙候祐經と踊り出づるを押止め。母の便りを何と聞く狂亂か弟。いや／＼。微塵粉灰になればとて。敵に聲を懸げられ憎々立つては骸の恥辱。放されよ十郎殿。ヤイ。

身の譽も恥も捨て。娑婆と冥土の父母を悦ばせ奉らんと。幼少より今日迄兄弟が念願はや。忘れしか時致。ハッアさうぢや。エ、残念至極。口惜しい祐成殿。無念な時致。あさましき會我の運命やと。涙の齒切り身を顛はし。握り拉ぐ太刀の柄。抜きかけ／＼はつし／＼と鏢打は。鏢切羽も一時に／＼碎け散るべう見えてけり。地龜菊手に汗握りしが。禿の時より善惡の事に採まれて驚かず。しやんと立つて申しお二人様。

顔顔を赤めてなんぞいの。たんと無念さうに見えるぞへ。廓通ひなされし程にもない。是が何の恥ぞいの。謂はれぬ差出か知らねども。他事ない虎様少將さん。龜菊が一座に居て。うつかりと見て居たかと思はんすも氣の毒な。地お侍の義に迫るも浮世の戀に身を碎くも。命懸けるは同じ事。假令ば酒の意趣ある中二日心か公用か。酔うてはならぬ首尾もある。其の足許を見て張合懸けての平強。得て是に手を取るわいな。そこらを千疋繫いで。恥をかくが手柄の基。さあ飲み伏せたと油断させ。地心を許す門立か思ひがけなき朝込。すつと仕掛け差引ならぬ手詰の盃。腕を捻上げ首を押へつぎかけ。／＼奈落の底迄飲伏せ。引起して止めの盃一献さいて。フシしやんと取り。是を本望本酒の手柄といふわいな。さりながら此の菊も。いつぞや山下宿で三日三夜。和田さんの大寄に朝比奈さんの無理酒には。地誓文とんと思ついたと。笑う

て其の座を寛げしは。フシ物に馴れたる仕打なり。地此の詞に兄弟差詰つたる氣を開き。母の疾病心ならず參會は重ねてと。立たんすれば暫く／＼。孝行の程感じ入る。祐經も一家の端餘所の様には思はず。北海道は遠ければ。山路の近道急ぎの爲。地某が秘藏の名馬。狩場まで引かせしを兄弟に饒せん。外道月毛婆羅門栗毛はへ／＼。あつと答へて引出す其の丈八十餘り。肉十分に分高く浦艾に口こはく。乗入れもせぬ野髪の一様の鞍皆具。遺繩追繩口取繩。つらを振れば六人の舍人もよろめきひつ立てられ。前脚かいて齒をたき人を嚇して鼻あらし。髪より洩る、眼の光フシ角なき鬼の如くなり。兄弟急度目配せし。必定此の馬に駈落させ。殺すか不具か恥か、せん謀。辭退せば猶恥辱と祐成會釋し。天晴れ名馬候。斯る名馬を申し受け。浪人の我我飼も舍人も不足なれば。地路次の間借用と。外道月毛を引きよせ乗らんとするに寄

せ付けず。鞍に縄れば鞍そばへ。前へよればすつくと立ち。後へ廻れば跳散らし。踏立て蹴立て高嘶き乗せんす気色はなかりけり。地南無三寶。前に大敵後に母の臨命終。一代一度の身の大事。コハリ弓馬の氏神鶴が岡。當所には富士淺間。箱根兩所駒形權現分身は。百和龍王右鶴王左鶴王。本地大聖。文殊菩薩の獅子の駒御手の如意は鞭となり。不動明王の縛の繩。手續に變じ給へやと慈悲の偈を繰りかけ。響の立ぎきむんずと揃んで。ゆらりと乗るにナホス恐れなく。頭を垂れて身を伏せし。佛神力ぞ有難き。時致嬉しく蛇に縄付けても乗らん物と。波羅門栗毛の口によれば跳上り。樟立尻込みあたりを蹴立てる馬煙り。つつと入つて太腹を裂けて退けとはつたと蹴る。さしもの悪馬もよろ／＼。ひるむ所を引寄せひらりと打乗つて。兄弟鎧踏ん張つて響を並び扣ゆれば。祐經案に相違して。只うつかりと大口を。フシ呆れ果て、ぞ見えにける。

地祐成勇めば時致きほひ。綱ヤア／＼團三郎。汝は是より秩父殿和田殿。其の外の方へ一禮申して假屋を仕舞へ。サア来い五郎。いざござれ。地十郎殿と一鞭くれて乗出すも。日脚も早き午未。我が身の運も上刻と。八卦占方八つ響く鐘に。誘はれ三重風さそふ。フシ朽木の櫻。地春過ぎて又いつの世の花をだに。待つにかひなき會我的里。痛はしや母上は河津に別れし夕より。二十餘年の物思ひ貧しき上に世を忍ぶ。兄弟の子の成人を急ぐは親の老と死を。フシ急ぐと知らで身に積る。地雪折れ松のむすをれに。俄病の萬死の床。樂しみは似ぬ孫晨が藁屋の紙帳漏りくる風。そよと寝返り息つきも。フシ今を。限りと聞えけり。地折しも大磯の虎化粧坂の少將。狩場の留守のお見舞も見捨てがたなく止まりて。地様々心を盡せども馴染なき身は病人の。お氣扱ひと差控へ。團三郎は富士野の使二の宮へ人を走らせても。夜明より夫婦ながら留守

とばかりに否慮もなし。打つにも舞ふにも京の小四郎紙帳によりては鼻息窺ひ。まだ歸らぬか祐成時致。扱も遅しと表に出でては南を見やり。足を空に駆廻り。地これ二人の女中。我等は現在母の腹より出たれども。五郎十郎とは胤變り。殊に久しく通路もせず漸う此の頃來懸つて。出来し顔の孝行だては兄弟衆の思はく。世間共に譯立たず。馴染なけれど兩人は縁といふに頭振られず。年寄られても女子とし遠慮なしに頼入る。第一が臨終の勤め／＼といふに付け。地扱ははや此の世の頼みも切れたかと。心細きの胸詰らしく紙帳ごしに口差寄せ。地追付け御兄弟お歸りに間もあるまじ。地それまでも先づ一筋に後生の事をお心に。お忘れなされな南無阿彌陀と。涙に濁る聲の色。母上息も苦しげに。地さればよ老の病の床。地後生忘るゝにはあらねども臨終の一念に攝取の。光明を期し。フシ十念の。枕の上に。聖衆の來迎を待つ事も此

の世の念を拂ひ捨て。一心亂れぬ上にこそ本願にも逢ふべけれ。我が子の絆に纏まれて闇より闇に迷ふ身は。三尊の來迎より懐しの祐成や。二十五の菩薩より床しの時致や。過ちでもしたるか心許なやあら遅やと。物ごしも早弱々と。子故に惱む狩場の雉。フシおのが命は忘れけり。夕暮毎に。兄弟を。待馴れしには彌増して。虎少將が氣も急かれ心も空に日は傾く。ハアあの鳴る鐘は早七つ。なぜに遅いと走出で。表に立てば内氣遣ひ内には心落付かず。門の出入幾度か。フシ鐘の数々繁かりし。仇は却つて情の馬會我兄弟が孝の鞭。切所難所の六里半。只一時に駆けさせ馬を道に乗捨て。つつと通れば虎少將そりやこそお歸りなう申し。御病氣頼み少なくかういふ間も危いと。地聞くも悲しく胸騒ぎ。ヤ小四郎殿。親切の看病忝しと。挨拶一禮そこくの足音靜かに床近く紙帳のつまに手を添へて。地祐成歸りて候時致歸りて候。御

心は如何ぞやなど御業は參らせぬ。北條殿より賜りし奇妙の藥是にあり。我々不便と思召さば此の藥召上られ。一日も御命延ばへてたべ母上とステテ涙を隠し申しける。地何兄弟が歸りしとや。近う寄り此處よれと紙帳のつまより兄弟が。手首をしかと取る手もゆるぐ玉の緒に。まだ力ある物ごしにて虎御前少將。晴々と此の紙帳取つてたべ早うくと宣へば。あいにく返事するまも老人は。いと心も短き釣手。手もむすまれて急げば廻る。あら鬱陶しやと押退け出づる母の顔。目の中儘に色合も常に變らぬ息ざしに。病人よりは側の人。フシはつと心ぞ煩ひける。母は怒りの目に涙。

が呼ぶには歸るまい。殊に今度の御狩の供は工藤左衛門祐經を討たん爲の謀叛とな。五郎めは勘當有して昨日今日。此の意見は幾度か色を變へ品を變へていひ盡し。今更同じ事いふに及ばぬ忘れはせじ。兄が勸めたか弟が勸めたか。合點の行かぬ五郎めが面魂。始めの氣が直らぬな。當時祐經は一國の大名何百騎といふ大將。そもお事等に討たれうか。一僕連れるか連れぬ身を祐經方のおぶれ者。忍び討ちに討ちたるとて其の時誰を恨むぞ。いふも愚か河津殿は坂東一の勇者兩國かけし大名なれども。奥野の狩の歸り足騙し矢は詮方なく。地命を失ひ給ひたる父の最期を手本にして。昔思へば老の身の此の頃子供、狩場の留守。あられう物か推量して。母も親の内ならば。可愛と少しは。フシ思ひやれ。母が此の病といふも偽の誠ぞや。地五藏六腑の病ならで病はなしと思ふかや。雨風の氣に當り物の祟りの病には療治もあり薬もあ

り。子の急の闇の病には唐高麗の名醫をよせ。萬巻の醫書を搜しても薬の方はよもあ

るまじ。地薬になるも二人の子病になるも二人の子。起臥立居明暮に病となつて痛め

んより。鳩毒となつて一思ひに殺してしまへ兄弟と。かつばと伏して泣き給へば祐成

時致虎少將。こは勿體なき御詞と疊に頭を打着て。沈み入つたる連涙。地無智無慚

の小四郎がフシ義理にも泣くぞ道理なる。地祐成袖を絞りかね。御御教訓と申し御不

便餘つて御恨み。暫しが中御心を苦めし段後悔恐れ入り候。敵を討つて命を捨つるも。

父の孝養母を悦ばせ申さん爲。御機嫌損ひ命を捨て、益もなし。祐成に於ては敵討の

事ふつと思切つたるが。五郎いかにとありければ。地不承々々に佛頂面。ハテ御生き

るとも死ぬるとも一所と言交した。兄きの分別變るからは獨り物にも狂はれまい。地

どうなりと勝手次第お返事なされと失り聲。あれ、あれこそ母が病の神元の如く

勘當と宣へば虎少將。詞エ、悪い聲付同じ物のいひ様で。あゝ畏つたとついなんどりとお受けはならぬ事かはと。地諫めても猶

面辭祐成大聲上げ。母上のお命の障り御勸當に懲りぬかと。吐られて喫驚し。口でま

だく申さんより誓文の爲只今御前で金うたふ。ヲ、尤いざ金打と兄弟抜寛け。打合

せんとせし所を母手に縋り押し止め。ヲ、出來したり。生先祝ふ若者ども。金打は

せぬ事ぞ。詞其の眞實を見るからは最早心も落付いたり。地嬉し、今こそ母が薬

となりし二人の子。元服させて此の方の痞が下りたと悦びのフシ。笑ひ顔さへ哀れな

り。地總じて若き男子に妻子といふ絆を早く持たせねば。身持を軽く命を塵とも思は

ぬもの。虎御前や少將とは深き契約ありこそせめ。押出して自らが嫁と呼ばねば定ま

らず。詞娶る時は必ず父母に申すと禮記とかやにもありと聞く。地今夜是にて祝言の

盃取囉し。祝うてたべと枕の文匣に疊み置

く。直垂二領。詞是は兄弟が爰はの晴れと嗜みし。一世一度の妹脊結び二人の嫁御。地衣紋風よく着せ給へ。狭くともあの部屋

を嫁入御殿になぞらへ。看は悦ぶ打飽折しも二の宮の姉がくれたる小樽をも。心

で結ぶ蝶花形母は持佛の前に寝て。河津殿の位牌諸共にざんざの聲聞かせてたも。

詞ヤア京の小四郎おのれは方々寄方多し。今夜は歸つて重ねて來い。地あれ日も暮れ

かゝる里の迎ひも來ぬさき。兄役に祐成夫婦部屋へ。あつといへども立ちかねて

恥ぢて赤らむ横顔を差込む虎が袖の下。是はく大人氣ないかみ様のお世話になる

事か。手管の逢ふ夜思ひ出し手ばしかうやらんせと。地手を取交はし入る振りや五郎

見やつて扱も兄き厚い和郎。こちやならぬウ、恥しと俯向きて。疊に喰付き。フシ身を

縮む。詞これ申し少將が若うて殿御の思ひ様。嫂に劣つたと姑御の思召も迷惑。地サ

アござんせと引立つれば。詞いやこちや否

が。八年讀誦し手に觸れし。姉御前に參ら
する。守袋は禪師坊。諸神諸佛の誓を直に
後世の。引導頼むぞや。鬢の髪は虎少將
クリ千筋と。なでし數々の。念佛申し手枕
の。移り香しめて忘るなよ。鞍と廻は鬼王
團三郎に取らすなり。我々が身に代り母
上の宮仕へ。頼む事は一つ。建久四年五
月間。天は暗しと申せども思ひは晴る、下
旬八日。祐成判。時致判と書止め。からり
くと筆を捨てスエテ聲をも立てず泣き居た
り。地名残はいつか盡きすべき短夜や更け
ぬらん。いざ來い五郎と先立てば續いて出
づる時致が大力の踏む足に。年經る家の落
縁をかばと踏抜きと落とつる其の響。障
子の煽ざはくく。紙帳の騒ぎに目を覺
し。■ヤア十郎様がおはせぬぞ五郎様もご
ざらぬぞ。■表よ奥よと立騒ぐ見付けられ
ては悪しかりなん。やり過して跡より抜け
んと頷き合ひ。荒れたる庭の萩薄。フシ引被
いでぞ隠れ居る。■なう此の紙帳の書置扱

は今宵討死とや。たつた今結びの盃して直
に離れてあられうか。かみ様のお敷きお腹
立ち。追つついて留めて見てつまりは共に
死ぬる分と帯引締め裾短か。襖かい裏け走
り出でんとする所に。奥より母上箒押取り
用捨も波の箒腕も。共に折れよと打立て
く。ヤレ思ひ切のない奴とてはたと打ち
未練者とて丁と打つ。■靡にては流れの身
こにては武士の妻。夫の親の敵討母が目
顔を忍んでも。共に見立て出してこそ弓取
の女房なれと打敷きく。■母は寝ても寢
入らず書置するを物間より。見て泣く涙は
いかばかり。そこを耐へた親心思ひやれや
とばかりにて。箒をからりと投捨てて轉び
ふして泣き給へば。垣越に聞く兄弟。宵に
は似ざる御心又もや御意の變るかと。立ち
も離れぬ夜の蟬。取付く露の崩れ垣。フシ忍
び音になく哀れさよ。■二人の女かき暮れ
て。■敵討つを曲事と御叱りの間もなく。
止むる我等をお咎めは。狼狽て猶氣が逃ふ。

■合點の上で諸共に思ひ切るなら切りたい
と。スエテ恨み顔にて口説き泣く。■母君い
と。目も開かれず。口は廻らす心は急く。
仔細もいはず杖棒當てて恥かしい。■昔を
知らぬ人々の不審なもことわり。兄弟の子
供が五つや三つの頃より。■父を討たせ無
念なと思ひ込うだる魂。成人に隨ひ増りこ
そすれ翻さぬ。弓矢取る身の念力母が留め
て留まらうか。■それ知り乍ら可愛そに死
目に逢ふと驚かせ惑はせ。邪魔を入れて呼
戻す其の邪魔は誰がさすぞ。恨しめや妾が
腹貸した。京の小四郎といふ胤變りの大悪
人。■怒に耽り襟に付き敵祐經が家の子同
然に身を寄せ。此の頃爰へ來りある事ない
事間者になつて喚出し。内通すれば用心し
討つべき透間もなきと聞く。病と獨り呼戻
し憐う辛う叱りしは。■惡人の兄めに聞か
せんため。彼奴めに聞かするは祐經に聞か
せ油断させて。易々と討たせん爲の親の慈
悲。心碎くはいかばかり。■一萬といひし

時よりも兄十郎は老成者にて愈忽せね生れつき。箱王の時より五郎は氣がさ者すはといへば氣が逸る。腕の骨の固まる迄人にも

油斷させんため。出家にすると箱根へ登し置きたるに。元服したる科ぞとて此の頃迄の勤當は是も敵に肌許させ本望を遂げさせんと。勤當も親の慈悲父の爲に捨つる

命。惜まぬ子には孝の道あり義もあり。討死すると知りつゝも勤むる母は何の道。恨めしの身の上や助かれといふ情はあれど。死ねといふ慈悲はなし。親の死を歎かぬ不孝の子は多けれど。孝行な子の討死を厭はぬ母は我ばかり。若き子供を先立て跡にさ

がる冥土の道。夫の河津殿へ言譯は何とせんと涙の限り聲かぎり。口説き給へば虎少將も絶入るばかり。母の愛心兄弟が身に應へ胸にしみ悲しさ詮方遣る方なく。伏拜み

ては泣き沈み。歎き入つては伏拜み思ひ。隔つるフシ破れ垣いと。涙に朽ちぬべし。地不便や可愛や兄弟がよしなき母にからま

れ。さぞや道をフシ急ぐらめ。地さりながら現世の望み叶ひなば。來世はなほ頼みあり。箱王を出家にせんと袈裟衣迄営みて。

佛に契約申したる其の詞を違へじと。代りに母が出家して其の袈裟衣身を放さず。是見よや嫁達と上の單を脱ぎかくれば。下は墨染五條袈裟一度にあつと手を合す。庭と

上とに四人の願ひスエテ四弘誓。願ぞ有難き。阿子を先立て、の甲は逆さま事とて其の子に罰の當るとや。身は箱王が代りにて今日より我こそ箱王法師。地十郎は我が兄五郎

は却つて我が親ぞや。いざ虎御前少將初夜の勤の頃なれば。親五郎殿兄十郎殿の菩提を祈らん持佛へと。泣く／＼誘ふ御姿兄弟

此の世の暇乞。名残り牡鹿の狩場へと急ぐ足さへ跡へ引く。立止まりても面影を中に隔つる小萩垣。物越もはや聞かせじと耳驚かす初夜の鐘。諸行無常を今迄は餘所に

聞きしも我が身の上。母は我が子の上に聞く。一つ響きを別踏の涙。涙に聞分けて。

又逢ふ夜なき親と子の袖の。露こそ重たけれ。

第四 虎少將道行

フシ妻戀ふ鹿の。身の果も。戀の文書く筆となる。あつてかひなき老の身は死して體の置所。同じ裾野と心ざし。スエテ馬に任する

道知るべ。是は若駒乗手は老の。姑一人嫁二人踏みも習はぬ雙鏡。流石夜道の力とや。油煙も細き提灯に。足元ばかり照されて。オクリしをれへ出づるぞ衰れなる。フシ先はい

づくと。眺むれど。富士さへ見えぬ闇の夜の今宵一夜は十五夜の。月にぞ替まほしの影。ギンオクリちら／＼。ちら／＼螢火か。いや兄弟のフシ亡魂よ。結び止めんと下がへ

の。棲吹き返す夜嵐に。長地はつと消えては狐火の我と我が身を迷はする雲より上の。一聲や。又二聲や三聲とだにも啼捨て

ていづち行くらん。やよや待てなれよ冥土の鳥ならば。死出の山路に關据急て。フシ先立つ我が子とめよかし。心覺えの。道程

も弓手は秩父の山おろし。松の響か磯打波か。晝なら三保か相ノ山清見寺鐘か。くくとフシほの聞え。猶も心ぞ急がる。きらめく露の玉澤村。暗はあやなし梅澤村オクテ二村。過ぎて行狂ふハツミ駒の蹴上の。鞆子川衣紋流しの。ア、曲もなや。フシ此の駒の。道の街に行泥み。地打てどもあふれどもなど進まぬぞ歩まぬぞ。哀れ一足に千里もがなとこがるゝとは。思ひ知らぬか白月毛の。駒に恨みの涙の鞭。打つにかひこそなかりけれ。○地いやなう駒に科はなし。此の別れこそ大磯道。夕暮ごとにお二人がしやんと乗されて通路の。戀の知邊の馴れくし。今宵はそれに引替り。乗手も道も替るとは。知らで止まる。フシ可愛さよ。ニ入地御兄弟の御形見今一度里の方へと押向けて。△引立て見れば不思議やな元の如くに歩み行く。引戻せば立ちとまり慕ふは誰そ。△我が夫。○我が子よ主の憂別れニスフシ共に悲む優しやと。鞍の前輪に縋り付き。

ステテ歎けば共に聞入れて。耳を伏せ尾を垂れて。フシ人諸。共に泣く涙おのが。毛色も染めぬべし。パルフシ歎くな駒に。せい付けてハイシイ。足柄越は風荒く。露を蒔繪の箱根山。フシ今行く道も。つひに行く賽の河原のいつとても。大人童の隔てなく。歌非は重たし迷ひは深し。何か菩提の。道と。なる懺悔。懺悔々々懺悔。何か菩提の道となるさんけくくく。ゑ色にそみ又。フシ香に愛でて。拾ひ洩らせる後世の種。ッシ闇の闇路を。如何にせん照らせ三島の宮所。御燈の光。しんくくと心も。清き瑞籬に。馬上の母は手を合せ。祈る願ひの百千千をいはで心に駒急ぐ。ハツミヲシ老木の。松は情なくて。初咲櫻接穂梅。盛りの花の嫁達の身には如何なる神無月。早月の雨の何時の間に涙の時雨そめ手綱。絞れど乾く隙ぞなき出行人に後れじと。笠取りあへず杖取らず常の姿を其の儘に。ステテ今来て見れば旅衣。裾野も。近くなりにけり

フシ星さへ見せぬ。松林。下は野澤のちりちり水裾は茨が綻ばし。足は草履が杓や伐株小石原。一寸先は暗のうたてや小提灯。細蠟燭もほの暗く駒の置き氣遣はし。御狩場もはや程近し。詞是から二人がお手を引き地いざそろくお歩ひと。抱きおろすもおろさるもフシよろめきながら下り立ちて。詞なう嫁たち。乗つてさへ草臥れる我が身で思ひやらるゝ。もう何時ぞ心のわくせきする故か。地鐘は四つやら夜半やら聞捨てて數へもせず。更けた様に覺ゆるに狩場の方に物音は聞えずや。兄弟が生死も誰か聞かせん便りなやとステテ歩みもやらず立ち給ふ。詞お道理やさりながら。我々が妹分黄瀬川の龜菊と申す者。祐經が氣に入つて狩場へも呼ばれし故。地御兄弟の御事を身に引締めて頼みしが。詞若けれども龜菊は侍勝の氣性といひ。義理強いは傾城の習ひ地よもや如才は致すまじ。あはれかし龜菊に逢ひたい事やといふ中に。草の葉越にちら

つく火影あたりを、照して見えければ。

そりやこそ事よア、氣遣ひ。一走りいて見てどうか。跡も危なしあれくと。心ばかりを碎く間に次第に近付く提灯に。女交りの笑ひ聲。調エ、氣遣ひないく。皆廓の駕昇ども。假屋々々へ呼ばれた女郎衆の戻りと見た。地若しあの中に龜菊のるやるか

いざ待合せて問うて見よ。母君は先づ暫しと草の繁みに隠し置き。小提灯の心切りしめし待つとも知らでざゝめきて。一節謡ふ聲のあや。三年以前の早月間。鳴立澤の歸るさに。禿小さんか誰やらが。養を取つて遊びなば。面白からではあるまいかと。

醉を勤めし夜半の風。今の氣色にナホス。吹きおくる。駕昇が癖は駕でふり。螢は光る淺瀬川。防けちやまつかせコリ乗物の。乗手は知れた提灯に。上と下とは磚花中に二重の松皮菱。黄瀬川の三浦とて。年まへの太夫大彌太殿とは深い中。是も狩場へ呼寄せられ繁れ松山羨しい。跡か

ら見ゆるは誰ぞいの。コハリ問はれて駕の簾より。招く扇や開き扇は朝霧様。狩場の露でしつほりと。濡れさんしたのく。濡れた印の三本傘雪折竹は奥州様。五十餘人の松の中ナホス。手管の上手め見たぞ遣らぬぞ。

ラ、悪口いふは誰ぞいの。問はれて言ふは珍しい問ふに及ばぬさし合くらす。中よしの兄弟御の假屋へか。龜菊様とも一座してお噂たらん。近い内逢はうぞる。先づおさらばと道を早めてそれそこへ。コハリいた

ら貝は岩崎様ナホス。網の手は菅原殿。舞うたる鶴は茨木屋のコハリ。左門殿。龜甲は輪違屋の花咲が。一座の座配逢ふ夜のわけ大一大萬大吉と。我を折鳥帽子立鳥帽子白一字黒。一文字屋の山の井殿。竹に。雀は仙臺屋の陸奥殿。遣手は露の幸ひ菱。覺むる眠りの梅ばつちり。コハリ並んで二つ提灯は大和屋の唐土。名も高橋の紋所。二人が心相籠で。追々に昇來る。地急かる、心に虎

少將詞をかけねば答もなく。過ぎ行く跡から龜菊が。印は粉ひも嵐吹く紅葉流しの紋提灯。コレ龜菊殿。虎少將ちや物問はう。乗物暫しと止むれば。待つてたも駕籠の衆と。忙がし中をせはし夏草。なう逢ひたかくせき草にぞおろしける。なう逢ひたかつた二人様。此方とても其の通り。して御兄弟のお身の上はどうぞいの。さればいな。

地いうてもく御運の弱い御兄弟。お袋様の御病氣とて俄に會我へお歸り。京の小四郎とやらが内通。何やかやで祐經とんと心を許しもう樂ちや。今宵から假屋に足を伸して。御狩中は緩りと酒盛しよとの前巧み。地是はよい首尾御逗留の間には。どこぞで本望逢させまじよと心力のありし所。今日晝過ぎ八つがしら鎌倉より。二の宮の太郎殿といふ人早打のお使。頼朝様の弟蒲殿とやらが腹切らんしたといの。是も御兄弟について入譯あつてちやけな。それで假屋々々の騒動踊りの崩れちやと思は

山 稽 會 我 曾

268

んせ。それゆゑ頼朝様も今宵八つにお立ち
鎌倉へお歸り。若し雨が三粒でも降れば明
日五つにお立ちが延びる筈。降つてもお先
手は八つ立ちとのお觸。荷を締めるやら何
やらやくたいのあることか。地私らが様に
假屋々々へ呼ばれた女郎衆。俄に里へ戻さ
るゝ此の有様見て下んせ。抱へる様に思
つても御運の悪い御兄弟。お知人にならねど
もおふくろ様もおいとしい。おこなさん達
お二人の心が察し遣られて。私や涙がこほ
れる。さり乍ら悔々と思はんすな。來らぬ
時節は是非がない。私も運が悪いは。ま
あ二三日狩場にゐれば。白兎の子貰ふも
の。地何も時節と思はんせ。もう別れんす
其の中えと。大事の咄ひつ撮みしどけ半ば
に云ひさして。フシ駕籠を早めて急ぎ行く。
地母君堪へ兼ね轉び出で。圓龜菊とやらん
の咄聞きました。ヲ、そなた衆も悲しい筈
母が心も推量あれ。地いふ事なす事ぐりは
まになり會我の運。ながらへて幾何の憂目

をか重ね見ん。命長きは恥多し。嫁御さら
ばと守り刀を逆手に抜き持ち。南無阿彌陀
南無阿彌陀佛と稱名の。聲より早く飛びか
かり擁放し。嗣愆な御袋様。命を捨て、御
兄弟のお爲になる事ならば。二人が命惜ま
うか望みさへ叶はぬに。母御に自害させま
し。不孝の罪は子に報い。一生御運は開け
まい御兄弟がいとしくば。思ひ直して給は
れとエテ縋り駆けばつと泣き。死んで
憂事聞くまいとは子を思はぬに似たれど
も。母が身にもなつて見や。子供の爲に
と病を作り。地思ひ設けし母が慈悲はフシ
仇となり。地雨さへ降らねばお立ちは今宵
八つ立ちとや。顔振る間もある事か假屋假
屋の騒がしきに。若し近寄りて見咎められ
盗賊なりと擲められ。却つて憂目に逢はう
かと。案ずる程身も顛はれ。自害せずとも
死に兼ねまい。頼朝公の鎌倉入を止むるは
雨ばかり。アレ〜星もきら〜と雲の一
筋あらばこそ。何ゆゑ雨が降るものぞ降ら

ずば望は叶ふまい。五月雨は五月の雨一
日過ぐれば六月よ。今宵二十八日の五月の
雨はなど降らぬ。月日に偽りますかと。
勿體なや天道迄恨み申すも此の母が。命の
情ない故ぞかし空目して死なせてたも。双
物たもれと縋りつく其の手を直に抱きつ
き。三人一所に顔見合せ。思はずつと聲
を上げ悶え焦れて歎きしが。少將様なん
と思召す。雨さへ降れば明日五つの御立ち
とや。其の間には御兄弟御本望は必定。お
二人の名を下すも。名を上げるも雨一つ。
地夫を慕ひ石になりたる女もあり。身こそ
賤しき流れの女となりたれども。一念は誰
に劣らうぞ。天道地神龍神も。流れの女は
守るまじとの誓もなし。命に換へて天道
へ雨を祈る志。そなたはなんと。ヲ、我と
ても其の通り。死ぬるに二つの道はない。
地サア〜早うと勇み進めば母君も。頼も
しき心ざし思ひ込うだる念力天道納受なか
らんや。我も共に立ち給へば。虎御前中

に立つ心の疑ひ夏草を結んで幣と禮拜し。眼をふさぎ心中に南無や三島の大明神。傳へ聞く古會部の能因法師。苗代水にせき下せ。フシ天くだります。神ならば神と。詠ぜし歌は國土のため。日の本照らす日の御神も。雨寶童子の御名は普き天の下。咎めて陳ねし。フシ大和歌。例もふりし雨乞の。

小野の小町も女なり。フシ我も亦女なり。三十一字は陳ねずとも。妾が倦りなき心百首千首の和歌となつて。感應の雨を下し願ひを叶へおはしませ。日頃信じ奉る普門品の天龍八部。阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅。其の外南海下界の龍神。二人の願女が一身の血を搾つて雨となし。夫の大望母の歎きを止め給へ。慈悲妙大雲澍甘露法雨。怖畏軍陣中念彼觀音力と。虎少將が小指を喰裂き流る。涙諸共に。コハリ袖に浸して虚空に散らし。一身五體に汗を流し足を爪立て肝膽碎き。地天を禮し地を拜し祈る。フシ心ぞ無慚なる。地諸天も感應過たず。コハリ

晴天忽ち常闇と虚空に閃めく電光。愛懸山に雲覆ひ。涙の雨を誘ひ來て。地俄に降り來る雨の脚オトリ篠を亂すが如くなり。フシ人嬉しき。地有難さ濡るゝも厭はず伏拜みく。御本望の末頼もしく。袂を母に打覆ひ狩場の方へ焦れ行く。されば五月二十八日に。今の世迄も降る雨を。虎が涙や少將の夜の。雨とも。三入名に高き。フシ富士の裾野の。地御狩の御遊鎌倉の騒動にて。急ぎ歸御あるべしとの時刻も雨に事延びて。假屋の騒もいつしかに辻の篝も影薄く。晝の疲の枕に短き夜半を鐘の聲。フシ夢より夢を結びける。地時節よしと會我殿はら。鬼王兄弟を故郷へ歸し。出立つ祐成が裝束は。母上より賜りし。秋の野に草盡し縫うたる練眞の單衣。村千鳥の直垂の袖を結んで肩にかけ。黒鞘卷の太刀を佩き竹の子笠の紐強く。上に下部の青合羽陣松明に道照させ。先に進めば五郎時致。是も母より賜つたる白綾に鶴の丸縫うたる袷衣。揚羽の

蝶の直垂赤木の柄の腰ざし。別當より賜つたる。源氏重代友切丸肩に打掛け紙合羽。しめたる笠の後れじと跡に。フシ續いて出立つたり。圓いかに時致。母の御恩を徒に今宵敵を打たずんば。不孝といひ世の人口生きたるかひもあるまじきに。天の恵か降る雨に。御寮の御立は延引す狩場の用意も事鎮まる。殊には浦の入道殿貸し給つたる此の割符。地頼朝公の膝元へも通路自由と聞くなれば。祐經を討つは案の内。假屋には定めて遊女數多あるべきぞ。罪作りに手な負うせそ。地雨はいつも降りながら。今宵の雨ぞ身にはしむ。討死せしと聞えなば思ひ切つたる御心にも。母の歎きはいかばかり悲し。さよと涙ぐむ。眞仰にや及ぶべき。祐經は籠中の鳥網代の魚。やはか洩らし候べき。恐らくは此の時致天魔破旬に出會ふとも。ちつとも怯まぬ魂今宵の雨は身にかかり。ぞつこん徹つてわぢくくと物悲しう罷りなる。地敵に出會ひ働かば所々の死を

遂けんも量られず。最期の盃一つ飲うで賜

れと。腰に付けたる懸烏帽子に降りくる雨

を受留めて。祐成が手に渡せば。なう七度

結びて兄となり。六度契りて弟となると聞

く。死にかはり生きかはり兄弟の縁は切る

まじと。さらりと乾して差しければ時致と

つて押戴き。調兄は親にて候へば母上の御

盃も是に籠り。天の甘露仙家の漿。此の酒

に勝らんやと。地受けては飲みく降りく

る雨は恩愛の、親と妻との血の涙。親子夫

婦の血を飲むと思ひ。フシ知らぬぞ哀なる。

地五月雨の一頻りおだゆみて空さりけなく

星々と。北斗の光鮮かに晴れ渡れば。調安

西の彌七郎新開の荒四郎。旅装束に下部

を引具し。雨も晴れて候ぞ。君は明日五

つの御發駕先手は追付けお立ちの用意と。

地呼ばはらせ打つて通る兄弟はつと顔見合

せ。此の騒に亂れ入り。討つて本望達せん

と。フシ袖すり途へかけ通る。コリヤく

く。調何奴なれば御假屋の側近く。斷り

もなく忍び行く。馬盗人が盜賊かそれ爾め

よとひしめけば。祐成騒がすイヤ苦しから

ず。鎌倉より祐經殿へ密々の御用の使。答

立して方々が所領の仇ばしし給ふな。疑は

しくば見られよと首に掛けたる通路の割

符。地は見られよと差出す兩人びつくり詞

を替へ。調存せぬ事とて雑言申せし御免あ

れ。新開安西咎めたりとは。祐經殿へ必ず

沙汰なしに頼み入る。地假屋へは此の辻を

左へきれ。行當りの大構へいざお通り候へ

と。馬鹿慇懃の空輕薄。結句敵の引入れを

オクリ仕濟し。顔にぞ別れける。地兄弟通る

る罅の口虎の威を借る此の割符。蒲殿の御

恩ぞと。御寮の假屋の傍近く。フシ忍び入る

こそ危ふけれ。地左右の假屋騒ぎ立ちお先

手は發足の御觸あり。合羽は取置き腰錢を

取落すな。馬よ鞍よと特めけば兄弟いよ

く。氣も急かれ。祐經が假屋とともさぞあ

らん。是迄忍びしかひもなく此の雨の降り

やむ事。神明にも見放されよつく武連に盡

きしかと。拳を握り齒を鳴らしスエテ虚空を。

睨んで立つたる所に。調秩父の執權本田の

次郎親經小具足に身を堅め。本陣の夜廻り

してけるが。會我殿ばらと見るよりも近々

と歩みくる。地兄弟たそと咎むれば波に搖

らる。沖津船。知邊の磯は此方ぞと叫く聲

に祐成はつと嬉しく。調重忠公の御情又は

御身の御懇情。此の度に限らねども。地御

禮申す事もなく禮儀知らずと思されん。

今青年來の大望達せんと存ずる所。調俄に

雨晴れ假屋々々は出足の用意。此の騒には

覺束なし此の儘歸つていつの時をか期すべ

き。無二無三に切込んで兄弟屍を曝す所存。

地重忠公へ一生積る御禮は。貴殿の執成頼

み入るといひければ兄弟が耳に口よせ。調

氣遣ひばしし給ふな。祐經は明日君の御馬

の御供。夫ゆゑ假屋も寢靜まる。地こなた

へく。靜にと道の案内の杖柱。フシ嬉しさ

類ひはなかりけり。地是こそ祐經が臥床な

り。心靜に本意を逐け會稽の恥を雪がれよ

と。いと懇の詞に縋り。御案内の程五百

生の體を焼くとも。いかでか報じ盡すべき。

隨つて通路の此の割符。蒲の入道殿より密

かに拜借申せしかど。御切腹の跡なれば返

辨申さん様もなし。我々が死骸にあれば。

蒲殿こそ御勤氣の伊東が末の曾我に與し。

叛逆の族よと死後の虚名に御骸を演さん

事。御恩を却つて仇にて報ずる道理、親經

殿に預け置く然るべく頼み存すると。二枚

の小札を手に渡せば尤々親經に任せよ。

主人重忠悪しくは計らひ申されまじ。老母

の事もゆめく、籠略候まじ。今暫くと存す

れども役目なれば知らぬ顔。弓矢の禮儀是

迄とッシ本多は。假屋に入りにけり。今は

何をか期すべきと兄弟合羽かなぐり捨て。

本多が教へし敵の假屋は是なりと。木戸駒

寄せを飛越え跳越え兄弟につこと打笑ひ。

天にも上る心地にて難なく臥床に討つて入

る。曾次に臥したる宿直の侍足音に目を覺

し。すは盗人よと呼ばはつて逃出づる。

假屋々々に聞付けて。ソリヤ盗人よ御立ち

よと。騒ぎの上に又混亂。相圖書かす太鼓

鉦かんくどんくどんくさい。又雨が延

びて來たお立が降ると入るもあり。雨の足

音さつさつさ人の足音どろくく右往左

往に三重もてかへす。其の隙に兄弟は

敵工藤祐經を思ひの儘に討擧せ。門外に走

り出で袂を絞つて喉を漏し。勢ひ猛に立つ

たりし。ッシの内こそ嬉しけれ。エ、心

地よい時致。年月の思ひに較ぶれば敵を討

つは易かりしな。餘り嬉しき心急いて忘れ

しが。祐經に止め刺しつるかかと問ひければ。

あれ程に切る上は何の仔細か候ふべき。い

や然はなし跡にて實檢あらん時。敵を討ち

は討つたれども。止めを刺さぬは狼狽た

りといはれんは。骸の上の恥辱ぞかし。ッシ

五郎いかにとありければ。尤と打鎖き。誰

をか恐れ忍ぶべき。のつさく假屋の歩

みぐわつたく踏鳴して引返し。障子襖は

らくと蹴放し。祐經が死骸にどくと誇り。

よつく聞け祐經一念の曠志によつて敵と

なり味方となる。六根の罪障消滅し不退

の彼岸に到れよと。腰の指添ひん抜き。も

そも此の刀は箱根にて初めて見参したる

時。得させたる赤木の裁刀。御邊元の主な

れば鐵の味は知つたらん。只今返す受取

れと右手の耳の下よりも。弓手へ徹れと刺

す程に耳と口とを一蓮托生。南無阿彌陀佛

と回向して。元の所へ立歸るに。ッシ手指す

者さへなかりけり。祐成待受け落ちば

此の儘落つべけれども。隠れ忍んで一生を

暮さんは生きたるかひはあるまじ。一足に

ても逃ぐるとは弓矢の恥辱。殊更我々ゆ

ゑに御生害ある蒲殿の御恩。御供申さで叶

はぬ命。浪人の我々が鑓太刀と奉公日の出

の段ばらが。刃を試して討死せん尤と。二

人等しく大音上げ。伊豆の國の住人伊東

の次郎祐親が孫。河津の三郎が二人の子。

曾我の十郎祐成同じく五郎時致。親の敵工

藤左衛門祐經を討留めたり。頼朝公の御内

に弓取りはなきか。下り合ひて討留のよ
と呼ばはつて邊を睨んで控へたり。地闇さ
は閉し雨は降る。假屋々々にすは夜討と弓
一挺太刀一振に。五人三人取付て我よ人
よと奪ひ合ひ。繁ぎ馬に鞭打つて進しと急
る所もあり。鎧に迂り甲に蹠ぎ。小手を脛
當草鞋を笠。上を下へと奔れば御馬屋の徳
竹大聲上げ。調物の黒白も見えざるに松明
出せと呼ばはれば。地二千軒の假屋より。
籠鞆蓑竹笠。傘箆に至るまで火を付けて
投出せば。裾野の闇は忽ちに百千の朝日影。
一度に照す如くなり。騒ぎの中より名乗り
かけく。切つて出づれば兄弟は小柴垣を
小橋に取り入替へ。く名乗りかへ。火花
を散らして雨交り揉立て。く三重に戦ひ
ける。地腕首切られて引くもあり頬先肩先
尻こぶた。弓矢の太股馬手の足首。矢場に
切られて死するもあり。されども兄弟薄手
も負はず血氣に進む時致は。假屋の人種絶
やさんと御所の間近く切つて入り。祐成は

柴垣の蔭に息をぞ休めける。假屋々々の松
明も降り来る雨に打消され。東西暗き木蔭
より。緋緋の鎧着て二尺餘りの打刀。三尺
五寸の太刀横たへ。四十足らずの武者一
人のつさ。く揺ぎ出で。抑是は先年
上意を蒙り富士の人穴に入つて。地獄の底
迄名を顯し。此の度の狩場には虎より猛き
猪を乗りとめ。日本無雙の譽を一天に輝か
す。仁田の四郎忠常とは我が事。物々し會
我殿ばら。思ふ敵は祐經一人。木の葉武者
五十百切つたると何の益がある。地仁田
の四郎が手にかゝり御勲氣の者の末孫と。
獄門の恥を受けたくばいざこいやつとぞ罵
つたる。調ヲ、よい敵ごさめり。仁田なれ
ばとて必ず勝つにも極らず。人穴の地獄の
鬼。猪など相手にしたとは違ふべし。十
郎祐成手並を見よと打つてかゝる。地エ、
無分別者は非なしと。閃く太刀影雨夜の星
フシ電火を飛ばして切結ぶ。地更に勝負もな
かつし所に。花やかに鎧うたる武者一人。
坂東聲を打上げあら穢らはし。我が名を
盗む曲者功名を食るか。伊豆の國の住人。
仁田の四郎忠常とは我が事見參せんと呼ば
はつたり。祐成飛じしさり。六十餘州は廣
けれども。頼朝の幕下に仁田ならで武士は
なきかあら仰々し。地瘦浪人一人か二人討
たんとて。彼も仁田是も仁田似たくしき
表裏者。二人共に餘さじものと打つてか、
調ヤヤ跡から出て仁田とは人眞似か。
地祐成は討たせじと懸隔たれば掻潜り。打
ち付くれば懸隔て。祐成一人に仁田は二人
入亂れて揉合ひしが。陽に開いて打つ太刀
を後の仁田が陰に閉ぢ。受流して裾を薙ぐ。
祐成が馬手の高股膝口かけて切落され。弓
手ばかりの片足立ち二打ち三打ち打つか
ひも。百手を碎く氣も弱り。フシ犬居にと
うと轉びしが。弟の時致はいづくにぞ祐成
こそ討たれたれ。死出の山にて待つべきぞ。
いふ事も是迄サア。いづれなりとも首を討
て。怯れたるか。聲かくる。調イヤヤ討手

の實否粉らはしく、黄泉の障りも悼はし、誠の仁田が面を見せ。名字盗を面縛させん松明出せと呼ばはれば。地忠常が下部ども提灯取つて差上ぐる。仁田と仁田が顔さし合ひヤア。二の宮。以前仁田と名乗つるは御邊よな。扱あさましやヤイ。兎死すれば狐是を悲むとは。同じ類に禍の來らんことを悼むゆゑ。元祿者の端くれ。御咎めの飛沫掛らんことを痛み。祐成を討つて一味せぬ身の言譯とははてよい思案。女房を離別せしは。他人になつて兄弟が力とならん心底尤。斯くあるべき事と感心せしに。さては立身の爲の離別か御分別く。地よしなき仁田呼ばりが奇怪さ。思はず駈合せあつたら若者を。手に懸けし残念さよと大きに怒つて恥しむる。二の宮からくと笑ひ。彌猴が帝釋天を嘲るとやら。おのれが足らざるを以て。人の大智を計らんとして却つて愚痴が顯る。二の宮が會我を討たんと思は。今日迄何の待つべきぞ。

地なまなか功ある男子と思ひ名字を借つてほつちらし。某他人になりたる徳天下晴れて匿へ置き。時節を待つて世に出さんと手を取つて。引かぬばかりにあしらへども。祐成退避かねば詮方なし。手柄はしたし怖くはあり。二の宮が聲を後楯に駈合せ。地零れ幸ひ指果報。地あつたら若者を思はず討つて残念などとは。義を知つた武士の云ふ事。猪に乗つて功名とする獵師風情の言分には。過ぎたくといはせも敢ず。地ヤア小舅を仕留めんとする程の不仁者。武士の情は存じもよるまい。地祐成が首は御邊急ぎ討つて手柄にせい。地イヤ人に貰うて手柄にする安清ならず。御邊討つて手柄にせい。イヤ二の宮討て。仁田討て。二の宮討てと責めかけられ。チ、小舅の會我を討つ刀。二の宮は持合せず。是で討たれば御邊討てと祐成と切合せし。太刀をかりと投出す。忠常おつ取り提灯に透かして見ればこは如何に。物打ちより切先まで刃

を石にて叩き潰し打ちみしやいだる樋同然。詞ム、最前より此の太刀にて討つ眞似したるか。アツア頼もしも優しとも。弓矢取る身の手本ぞや。地雜言御免二の宮殿。詞それこそ互惡口御免仁田殿。和殿の如く情ある友を持ちたる五郎十郎。地御分の如く誠ある縁者を持ちたる會我殿ばら。一生花實も、フシ咲かざりし。天運の拙さよと。地今を限りの祐成起直り。詞縁者と申すも二人不覺の落涙に、フシ鎧の袖を絞りける。地元は。他人の二の宮殿。好みなき仁田殿御芳志は。五百生替り死替るとも忘るまじ。地御手にかゝり討たること。祐成はなんほう果報の者。首討つてたべとくくと。いへども二人涙にくれ。差俯向いて居る所に御所の方より聲々に。詞會我の五郎時致御前近く亂れ入り。御所の五郎丸が組止め。御假屋安隱なりと呼ばはる聲に祐成。あれ聞き給へ。地時致は召捕られしとや。祐成が最期いかにと案すべし。疾首討つて兄

が最期清かりしと。悦ばせてたべ仁田殿頼入る。南無阿彌陀佛。彌陀佛と首差しのべて目を閉つる。名ざしの上は承る御心易かれと。太刀抜き持つて後ろに廻り。振上ぐれば祐成が。首は前にぞ遠方に早曉の八つの鐘。鳥も啼くく人も鳴くフシねをなく千鳥の。直垂に首よ涙よ包みても。洩れて名高き富士の嶽會我。兄弟が會稽山。骸は裾野に埋めども譽は三穂の松の風。他の國迄吹傳へ昔。語りを今の世の。人の眠りを覺しける。

第五

地運關三百六十輪。天運三千六百周頼朝卿の武運に和し。御狩の御遊建久四年五月二十八日。晝夜十二時に事終り。同じく二十九日の鷄鳴梶原平次景高朝比奈の三郎義秀。フシ御迎として參上す。地鎌倉遺御の御供揃ひ廣庇に出で給へば。秩父北條和田岡崎何れもお供の出立にて伺候あり。因幡守大江の廣元。奏狀訴狀口書等數通御前に持

參し。是は御狩中諸人の願ひ訴へ諸檢使の覺等にて御座候。鎌倉へ歸御あつて御裁許あるべく候や。但今朝聞召上らるべうもやと伺へば。御寮聞召され鎌倉へ歸つては留守中の訴へも多からん。地狩場の間の事どもは只今是にて沙汰せんす。廣元讀まれよとの御説にて逐一にこそ讀んだりける。五月二十八日會我兄弟亂入の刻。御家人手負の檢使竹下孫八左衛門。同じく安田の三郎檢分の覺一つ。太樂の平馬之丞頼先深疵。但右の方なれば逃疵の事。一つ愛甲の三郎弓手の腕。馬手の肩後疵二ヶ所。一つ安西の彌七郎右の横腹深手賜すたくく切り。存命不定に相見え申候一つ。臼杵の八郎頭を割られ即座に討死。一つ新開の荒四郎小柴垣を破り逃げ候砌竹のひつ削にて左の眼突潰し申し候。但白身の怪我の由口上。地次を讀まんとする所を頼朝暫くく悉く聞くに及ばず。鬼神なればとて兄弟二人に見苦しき働き。假令薄手かすり手負うせたりとも討留め組留めずんば。功名にあるべからず。末代の批判諸家の恥を残すに似たり。地御前に於て是を引裂き燒棄てらる。フシ大智の程を尤なる。地次の一通押開き。伊豆の國の住人仁田の四郎忠常恐れながら言上。一つ二の宮太郎安清専ら忠義を存じ。會我兄弟が縁者たるを恐れ女房を離別致し。猶以て祐成所存を察し己が名を隠し。某が假名を致し祐成を喰留め申し候刻。横合より下り合ひ首を取り申し候。某此の度の功名は全く二の宮功名にて御座候。此の旨披讀願ひ奉り候以上月日。頼朝大きに感じ給ひ。鎌倉の早打時を違へず重々妙妙の仕方。親殺し主殺しの外一家に祟る法はなし。女房も以前の如く相具し兄弟が老母介抱等。地少しも憚るべらず老中此の旨沙汰せられよ。扱仁田の四郎が功名は今に始めぬ事ながら。譽を他に譲つて身を謙る勇者。感じても餘りあり。恩賞は鎌倉にて計らふべし。フシ次はくと宜へば。恐れながら

言上。拙僧儀は藤澤寺の住持瑞阿上人と申す者にて御座候。今晝時分工藤左衛門祐經殿家來近江の小藤太と申す仁參られ。梶原平次景高殿仰せに候間。日中九つの鐘をさし置き八つに撞き申すべき旨申され候ゆゑ。叶ひ難き由申し候へば拙僧を初め寺僧ども残らず搦め。自身鐘を撞き近在隣郷刻限混亂仕り候。後日の御咎めを恐れ言上仕り候以上月日。頼朝大きに御氣色損じ住持が訴へに限らず。隠目附の者ども宵に耳へ達したり。頼朝の入道が切腹も相手は景高と聞く。鎌倉に於て急度詮議相違ぐべし。地それ迄は和田の義盛に預け置くぞと宣ひも果てぬに平次景高。此の儀は段々申譯といふ所を朝比奈の三郎義秀。小腕を取つて捻す。言譯あらば追つての事。今日から親仁が預りぢや。北の丸で榎谷が朝食の相伴に。汝が面をはり残して残念と。地四つ五つはりこかし羽搔掃に引括り。フシ家來がにぞ渡しける。地廣元一通又取上げ。

會我兄弟嵐變りの兄京の小四郎恐れながら言上。右祐成時致豫々の企承り及び數度意見に及び候へども許容なく。御狩場の狼藉至極上を憚らざる次第恐れ入り存じ奉り候。是に依つて老母並に大磯の虎化粧坂の少將と申す遊女。兄弟一味の者ども以上三人搦め置き申し候。私同心仕らざる所聞召分けられ。御褒美頂戴仕り候はゞ有難く存じ奉るべく候以上。君御顔色損じ悪い京の小四郎が訴狀。よつく當代を詮議暗しと見立てしな。兄弟が力に成る程こそなくとも。祐經が内通の間者となつて老母が方へ入り込みしといふ事。頼朝聞かであるべきか言語道斷諸人の見せしめ。地老母二人の遊女急いで繩を許し。捕手の者ども其奴め召捕り來れ。畏つて罷立たんとする所を朝比奈の三郎又つつと出で。何の彼奴めに捕手の者我等に仰付けられかし。ヲ、兎も角も。地忝しと立出でしが立戻り。若し異議に及ばば搦殺して棄て申さんか。イヤ／＼問

ふべき仔細あり殺す事は無用／＼。地はつと答へ立出でしが又立歸り。然らば死ぬ程に。骨々ほつき／＼捻折つて參るべきか。ヲ、其の段は兎も角もと宣へば。アイ忝いコリヤ。地面白からうぞと。フシ小踊りしてぞ入りにける。地頼朝重ねて日も長けなば鎌倉入り明日になる。路次の經營も如何なり。相殘る訴へは鎌倉にて聞くべきぞ。先づ時致を引出せ一目對面せんとぞ仰せける。お次に控へし御所の五郎丸時致が繩引立て御白洲に引する。兄弟狼藉の餘り此の者御寢所近く切入り。御命危かりし所。其難なく組留めて候と殿しけに言上す。五郎居文高になりヤア御尋ねもなき口上だて。地時致言上する事あり。耳を澄ましてよつく聞けと御前の方を振り仰向き。恐れ多き申し條にて候へども。弓馬の家に生れて親の敵を討ち候事。僻事とも狼藉ともよも御不審は候まじ。只今召出されしは御所の假屋へ切入りし御咎め候な。時致も好む所

には候はねど。下り合ふ兵頭はりに逃足強く。一人も手に立つ者候はず。御所の内にはよき武者を宿直仕つらん。功ある武士に出會ひ討死せばやと奥深く切入り候所に。四扱々當代のきれ物は化物と功なる武士。以前我が君討つて出でさせ給ふ音。年にも足らぬ大友の一法師が御物の具に縊つて。曾我兄弟鬼神なればとて御手を下されんは源氏の御恥辱。殿ばらに仰付けられ候へと諫言申すを遙かに聞き。殊勝や優しやさすが大友の家の總領。あはれ此の一法師が手に渡り討死せばやと存する所。是なる五郎丸薄衣被き取つたといつて確と抱付きし。頭付は意なり是こそ一法師ごさめれ。望む所と嬉しく易々と揃められ。地今の千悔萬悔おのれとだに知つたらば蹴殺し、捨てんもの。よし／＼申して詮なき事疾疾首を召さるべしと。ステテ詞す／＼しく言上す。地五郎丸聞きも敢へず。調ヤア生れた跡の早め薬口ばかりの廣言いふ／＼。既

に我が手に入りたる時一代一世の力を出し。振放さんと足手をもがき。許せ／＼と大聲上げて吠えたれども。悔りとも動かせず取つて引締め繩かけたを忘れたか。よし口を聞く手間で念佛申せと冷笑ふ。五郎くつ／＼と噴出し。心あつてかゝつた繩おのれが力でかけたとは。體より口の廣い奴。とても死なんす命よしない力みなれども。時致が偏りと君の思召諸大名の蔑視も無念なり。地おのれが力に揃められぬ證據。是見よと筋骨に氣を込め。一搖揺つてゑいやうんとはつたる。高手小手の繩ふつつつと切れたるは。三歳の童がフシ燈心切るより易かりける。地飛びかゝつて五郎丸を膝の下に取つて引伏せ。ヤア調夜前おのれが力にて。地揃めたが定ならばま一度御前で揃めよと。胴骨を膝節にてひしけて退けと押しければ。聲は出でず兩眼に溢す涙は雨やさめ。フシ油を搾る如くなり。地斯る所へ朝比奈の三郎小猫を提けたる如くに

て。京の小四郎が細首撮んで駈來り。御前にどうと打付くる。調頼朝御覽じ汝は親兄弟に逆らひ。敵に與せし無道者。此の世に祐經が居ぬからは未來へ參つて奉公せい。地それ／＼暇と宣へば時致護んで頭を下け。調明かなる御政道先立ちし祐成さぞ有難く存すべし。さりながら胤こそ變れ兄は。命召されんをまざ／＼と見てゐんも不仁の至り。地助命願ひ奉るとステテ思ひ込んで言上す。地時致に免じ命は許すぞ割りこほつて追ひ拂へ。承ると朝比奈剃刀も刃物の内。おのれに當てるは穢らはし。義秀が手剃刀戴けと髪くる／＼と手から巻き。一引ぐつとあ痛た。調ヲ、痛い管一引きが千僧供養。二引きが萬人の物笑ひ。地鳥の毛を引く芥子の花挽ぐすんほろ坊主。ねつたい坊主鉢坊主。是がお寺の長助と。フシ笑うてこそは追立てける。地時致五郎丸を引起し三間ばかり取つて投げ。申す事も是限り今生に用なき男。サア寄つて繩掛けられよと

後手うしろてになつて、フシ待ちければ。地雑色ちぞうしきども

早繩はやなわ持つて立ちかゝる。阿、暫しばししくくと

御聲ごこゑを懸かげ給たまひ。日本無雙よめふたの兄弟あにがた助け置き

たきものなれども。兄祐成あにすけなりが討たれし上は

助かれといふともよも助からじ。頼朝よりともが父

義朝よしみつねを討つたる長田の庄司ぢやうしめが首。討つた

る時の嬉しさは。平家の一門が首百千にも

かへざりし。彼等かれらが今日けふの心の悦よろこび命いのちの何

か惜おぼしからん。地國ぢくにの憲法けんぽう是非しぜいもなし鷹たかが

岡おかへ引出ひきだし。今生けんじやうの暇ひまとらせよさりながら。

一騎當千いつきたうせんの兵へい。雜兵ざへいに繩なわ掛けさせんは。弓

矢やの真加まかも恐れあり。頼朝よりともが繩なわ掛けんと忝かたじけ

くも御大將ごたいしやう白洲しろすに飛び下おり。眞紅まごゝの房ふら打うつ

たる御鎧ごよろいの總卷そうまき取とつて押おしたぐり。頼朝よりとも

が右みぎの手てには西三十三ヶ國せいさんじゅうさん。左ひだりの手てには東

三十三ヶ國さんじゅうさん。六十餘州ろくじゅうの力を以もつて懸かけたる

繩なわぞ恨うらむるなど。地御聲ごこゑの内うちよりも時致ときぞわ

つと聲こゑを上げ。ナウなう伺候けいごの大おほ名な小こ名な秋津島あきつしま

を海うみに懸かふれば。半程はんじやうもなき數かずならぬ時致ときぞ

が。親おやの敵たか討うたずんば日本よめの大將軍たいしやう。頼朝よりとも

公きみの御手ごてより繩なわを受け。斯かる情なさけの御詞ごことばを聞

くべきか。父河津聖とうづみ靈たま先立まへだちちし祐成すけなりもい

かばかり。フシ悦よろこび奉たらん。地哀あはれ今いま一度生い

れかはり御馬ごまの先まへにて討死うちし。此この御恩報ごおんぱう

じたや三寶佛さんぼうぶつ陀だも憐あはれ給たまへと聲こゑを。あけて

泣なきければ。地滿座まんざの諸武士しよぶし感涙かんだいし鬼おにを

欺あざむ朝比奈あそひなも。羨あやしや時致果報ときぞくわう者ものよ時致ときぞ。

有難ありがたの我が君きみやとすゝり上げく。涙なみだの内うち

の悦よろこびは。フシことわりとこそ聞えけれ。地和わ

田秩父千葉上總たぢちよせんじやうじやう。心こゝろあらん者ものどもは繩なわに手

をかけ結縁けつえんせよ。御立ごたてちざうと呼ばはれば

御門ごもんに控かまへし虎少將こせうしやう。母ははを誘いざなひ走入しやうにり。君

を禮らいし時致ときぞが繩なわに縋すつて悦よろこび泣なき。門かどに御

馬うまの嘶な聲こゑ假屋かりやの木戸きども明あ七ななつ谷や七ななの鎌かま

倉くらへ。目出めでたく還御かへりなされける。今日けふ一日いちにち

の十二時じふにじ。くくつもり積たつて百千年ひゃくせんねん。

盡つきせぬ源氏げんじの繁昌はんしやうこそ民安たみやす。全ぜんの國土こくどな

れ。

七行大字直之正本しちぎやうだいじやくちのほんぽんとあざむく類板るいばん世よに有

といへども又またうつしなる故節章こせつしやうの長短ながみぢ墨ぼく

譜ずの甲乙かへつ上下じやうげあやまり甚こすくならず三

寫か寫か焉な馬ばなれば文字もじにも又また違失ちがひ多おほかるべ

し全く予まづかが直之ちやくち正本ほんぽんにあらず故ゆゑに今いま此

本ほんは山本九右衛門治重新やまもとくさうゑもんぢしんしんに七行大字しちぎやうだいじやくちの板

を彫うて直ちやくちの正本ほんぽんのしるしを糺ただせよとの求

にしたがひ予まづかが印判いんぱんを加くわふる所左ところひだりの如ごとし

大阪高麗橋堂丁目

正本屋 山本九兵衛 版

竹本筑後掾 (本竹) 教博

山本九右衛門 版